

平成28年（西暦2016年）4月

瞑想録（その12）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。私のライフワークは、狭い意味では連続体の神秘をアニミズム的多神教で瞑想する、「連続体と蓋然論理」です。最近ではより広範に、「人間とは何か、自分とは、そして宇宙とは」と言う観点を、科学ではなくまた学問でもなく、専ら瞑想で追い求めています。そのためのキーワードは「素朴な疑問」と「意外な気付き」です。つまり真の知恵について瞑想しています。瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明やトンデモと言われそうな見解も含まれていますが、世の中科学で証明された決まりきったことだけではつまらないでしょう。私自身、「つまらない事実よりも出来の良い冗談の方が面白い」と言う立場で居ます。ですから、あくまでも新提案部分を肯定的に拾ってあげるつもりで見てください。その上で本文の言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。私は死後の世界に恐れはないですし墓も要らないのですが、あたかも墓誌銘には、“He loved freedom. He meditated for interest. And he lived a pleasant life.”と書いてほしいと願っています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2015. 02. 25

## 1、含意もしくは前提

先日も見たように、判断は意識の脳空間内における推移に基づいてなされる。その推移の特殊な一形態として含意あるいは暗黙の前提に当たると言った、「既に含まれている」系の場合がある。本日はそれらをいくつかの例を見てその推論が果たして確定推論か蓋然推論か、あるいはまた人工知能にもできるほど自明な推論か否かを検討する。

・「バイトは月水金に来てください」、これは単に「バイト合格です」よりもはるかに確実に合格を宣言している、それは具体的になって情報が増えているからだ。従って前者は後者を含意していることになる。この含意を人工知能は理解できるか。たぶんできないだろう。理由は「合格です」と「来てください」の関係が決して自明ではなく、意味

内容に踏み込んだ理解が必要だからだ。

・「藤沢市の人口は40万人です」、この言明は、①人口が40万人の都市が存在すること、②藤沢市が存在するということ、を含意している。しかも確定論理だ。これはこの推論が情報の単純減少に過ぎないことから分かる。だからこの推論は人工知能にもできるだろう。意味に踏み込むことなしに形式で判断できるからだ。論理学がやっているのは、もっと広く学問とはこの程度だ。

・「その部屋は辞めさせ部屋ではない」、この表現にはそういう疑われそうな部屋があると言うことを暗黙の前提として認めている。従って確定論理と言うことになる。ただし人工知能ができるかどうかは際どいところだ。微妙に意味解釈に触れているからだ。

・「太郎は3日前に有楽町に行った」、この表現は①太郎は有楽町に行ったことがある、②太郎は3日前に外出した、③3日前に有楽町に行った人がいる、の3叙述を含意している。ただしこの場合①と③は自明で人工知能にもできそうだが、②は外出の意味が分からないと含意であると判定できないので人工知能にはできない。同じ表現でも含意に確定推論と蓋然推論が混じることがある。

・渋谷109の下の地下道に、「ここに泊まった人は8時半までに片付けてください」と言う張り紙があった。これは段ボールホームレスの野宿を暗に認めていることを含意しているのか。もし「認めていません」という答えならばこの張り紙はそもそも無意味だということになってしまうが、「いけないけれども更に徹底して注意している」と解釈することもできる。つまり、「空とは無いし無い状態も無い、徹底して無い状態である」と同様の論理だ。だからこの推論の種類については、この表現を含蓄と取るか矛盾と取るかによる。

・モーセの十戒に「人を殺してはならない」とあるということは、人殺しが現に結構あったからだ。これも上の例と同様だ。

・あるマンションの入り口に「通り抜け禁止」と貼ってあったけれど、これって「ここは通り抜けできますよ」と教えているようで逆効果じゃないか。この含意は人工知能にメタルールを仕込んでおけば推論できそうだ。気づきはあるが論理推移自体は極めて形式的だ。単に人工知能が逆効果の妙味に気付いていないだけだ。

・彼は指を切った→彼はけがをした。これは含意しているとしてよい。ただ、手を切ることがけがの一種であるという意味認識またはルールが必要だ。いずれにしても人工

知能が当然にあるいは自発的にできることではない。「なあに、指を切るくらいケガのうちに入らないよ」と言う答え方もある。

・「株式相場に競馬以上の社会的価値があるのでしょうか?」、この問いには暗に、「競馬にもある程度の社会的価値がある」という前提が含まれている。暗黙の前提こそが真のしかし形式的でない確定論理ではないか。つまり「人工知能にはこなせないが実は当然の推論だ」と言う時点で初めて論理であり、今論理学が扱っているのは単に計算機の下受けだ。そしてここで言う当たり前さを超えて、初めて「真の蓋然論理である」と言える。

・「午前中はご遠慮ください」、論理的に理屈を言えばこのお断りは午後については何も言っていないことになるが、現実的には大抵、「午後にはおいで頂けます」の意味になる。もちろん絶対ではないが、午後に出かけてみる、少なくとも問い合わせる価値はある。

結局、「含意や前提は当然に確定論理であり人工知能にも可能だ」と言うことはなかった。そして分かれ目は、含意もしくは暗黙の前提と言う関係を、意味に踏み込まずに判定できるか否かにあって、かつ現実的にはどちらの場合もありうるということだ。

## 2、蓋然推論の例(その3)

まず断っておきますと、すでに何度も指摘していますが、これら一連の記事での記載はあくまでも瞑想によって得た自己実験的な手続きです。科学ではありませんしそれ以上の根拠ありません。おそらく多くの人が賛同してくれるだろうと願っているだけです。

先日「意識の発生と推移」と題した記事で指摘しましたように、人の脳内作用の本質は心象であり、その心象は外的内的な要請や刺激によって生起あるいは推移します。そしてその心象の核心は、脳内で適切に位置された単一のアナログ集合です。つまりたとえ問いかけが長くて複雑な言葉でなされたとしても、その究極の形は単一の心象であり、その問いかけに対する返答も先の単一の心象から直接に生起される単一の心象です。

その単一の心象を適切に展開することによって、具体的な言葉の返答が形成されるわけです。そしてこのプロセスの核心である、問いかけの心象から返答の心象への推移は、素朴な感性によってなされるのでたいてい非論理です。本日はこの意識の

推移の様相について、いくつかの例に依って具体的に見ていきます。

・（老人がバスの中で）「最近の若者は席を譲る気持ちがなくてけしからん」→（若者）「お前こそ俺たちから取り上げた年金で遊んでいるのだろう、金を返せ」。  
これは典型的な感情的推移です。問と回答はジャンルが全く異なっていて会話として成り立っていませんが、心象の応酬としては極めてよく理解できます。若者の反論は一見暴論に見えますが、席の話をもとに年金を類推できるのは高度の連想力に依るものです。

・「君は年賀状を何枚もらった？」→「あなたって十分に俗物だね」。  
この例でも論理は飛躍していますが、「年賀状の枚数を気にするというだけで十分に反吐が出るほどの俗物だ」と言う気付きは、知恵の粒度が高いです。

・「どうも固いと思ったらこれは石か」→「そんなことにも気づかなかったのか」。  
ちょっとバカにした感じもありますが、常識的にはこういう推移でしょう。

・「僕のどこが悪いと言うのですか」→「顔が悪い」。  
この例になるとかなりバカにされていて、論理もむちゃくちゃですが、笑えます。つまり心象推移の段階で、受けを取れる方向を無意識かつ瞬間的に選んでいます。

・「笹野高史ってどんな役でも器用にこなすね」→「ああ、主役以外何でもやるね」。  
ほめ言葉を瞬間芸でひねって、ブラックユーモアで答えています。同一人物の別の面に、あるいは同じ面の真逆な表現に気付いたわけです。この気づきも粒度が高いです。

・「ある所にお爺さんが居ました」→「結論から言ってよ」。  
出だしの調子から経験に照らして「素直に聞いていると長くなる」と直感し、これを阻止する方向の対策が直ちにひらめいたということです。

・「ヒロシさんはネバーランドに行きました」→「そんな場所はないですね、嘘でしょう」。  
地名の響きから「嘘くさい」と直感し、この時点は反論が正解だと判断しました。否定しても失礼に当たらない相手だということも併せて同時に直感しています。

・「暑くて疲れたよ」→「それは大変だったね」→「いや、大変ということもないけどね」。  
こうやって非論理にのらくらしながら、心象の推移と言葉のやり取りが続いていきます。効率は良くなって冗長度が高いですが、これが通常の会話です。しかもやり取りして

いる2人が別人格なのに、ほぼ同じところを理解し合っています。

・大学って意外と友人ができない場所だ。

これは会話でなく自分に向かってつぶやいているのですが、つぶやいた結果に本人も納得して終わっています。

・（文芸や哲学分野から誰か天才の例がほしい）「そうだ、シェークスピアが居た！」  
内省の過程で、何の脈絡もなく突然に正解が出ることもあります。こういうヒントなしの本当の直感って、これ以上の分析が難しいですね。

・「娘に居場所を取られちゃったね」→「どこの家でもそうでしょう」。

特殊例を一般法則で答えています。一見何気ないようですが、状況と言うアナログ的景色をもとに法則と言うメタでデジタルなものを連想していて、これも連想の粒度が高い例です。

・（そのまんま東が自民党に）「私を総裁にしてください」→（聞いた人々）「あいつらしい面白い冗談だ」→（次の日も繰り返すので）「東は本気だったのだ！」→「このバカたれが、身の程を知れ」。

これは実際にあった出来事です。このやり取りで面白いのは、誰もが最初は冗談だと思う点で、これは典型的な蓋然論理です。そして蓋然だから間違ふこともあります。そして間違いであることが分かると、人々は騙された気になって怒り出します。こういう心の推移を字面から読み取ることは、人工知能にはおそらく無理でしょう。人工知能に無理と言え、人の脳内で起こるアナログな心象の推移、これが人工知能には一番無理です。

一般に応答や反応は人の脳内の心象によってなされますが、この心象の働きや反応行為をあえて言葉にすれば、「連想」が一番近いでしょうか。もっと具体的に、脳空間内のどういう座標軸で働いているか知りたいものだが、なかなか難しい。特に、連想と言っても話の流れや期待される答えの方向や問全体の雰囲気等から、その連想の方向は微妙に異なってきます。

### 3、アナログ不変量

先日パソコンを新調したので、新しいパソコンを不注意で早々にダメにしないように注意事項を調べたところ、ノート型パソコンの弱点はキーボードだということが分かった。丁度携帯をトイレ等に落とすと内部が濡れてショートするように、パソコンのキー

ボードにお茶など垂らすと内部に水が浸水してショートしてダメになる。これがジュースやコーヒーのような粘着物だともはや絶望的だそうだ。

そしてうっかりこぼしたときは素人には何もできなくて、直ちに強制シャットダウンして修理に出すしかない。だが修理と言っても職人がばらしていちいち手でふき取るしかないので、仮に治ったとしても新調の方が安いほどの人件費がかかることも希でないという。言われてみればその通りだ。

そこでふと思ったのだが、なぜパソコンの清掃はそんなに手間がかかり、他方で衣類の洗濯は自動洗濯機のボタン一つで簡単にできてしまうのだろう。そもそも洗濯一般で見たときに、パソコンのケースと衣類のケースとどちらが普通で当たり前なのだろう。これの答えは明らかでパソコンのほうだ。何事も同じブツは2つとない以上は個別対応が当たり前で、まとめてできてしまう方に何らかの秘密があるはずだ。

そしてその秘密とは、衣類の場合で言うと、細かい違いに無関係な衣類として共通の性格つまり不変量があって、この不変量を活用することにより手間が省けているのだ。と言うことは、人にとって望ましい省力化のためには、個別の違いを超えた不変量を探し出し、かつその不変性を活用する手段を見出すなり創造することがすなわち新規ビジネスの王道だということだ。

衣類で言えば、旦那のシャツだろうが嫁様の靴下だろうが共通の性格、それは可塑性があって水に溶けなくて汚れは取れやすいということだ。そしてこの不変性を活用する道具として、電気洗濯機や洗剤が考案され改良されてきた。この手の改良は社畜様のお家芸だ。実際これらができる前の戦前では洗濯は1枚ごとで、主婦の大仕事の一つだったではないか。

似たような例はいくらでも見つかる。次の例はスーパーだ。昔は商店街の店ごとに買い歩くしかなく、手間がかかるうえに人件費の占める割合が大きかった。今や商店街1つ分くらいの商品をスーパー1軒が担っており、しかもそれを管理するのは店長と副店長と言う2人の正社員と、あとは時給千円くらいのおばさん十数人で済む。なんと効率の良いことか。これも個々の商品の個別の性格にとらわれず一括して「売り物」という不変量と認識できたからなせる業なのだ。その証拠に、不変量や法則がどうしても見つからない戸別配送、宅急便とかコンビニのお届けとかは膨大な手間がかかっていて、いまだに安価にする妙案がない。

昔から数学や物理等のデジタルな学問においては、不変量の発見は大変重要だった。

不変量がマイルストーンになって世の諸事象が統一的に理解でき、理論が大きく進展してきた。だが不変量は以上に見たように、現実的で全部個別のアナログにおいても大変重要なのだ。もちろんアナログでは「完璧な不変量」と言うものはありません。2つと同じものはないからだ。

2つと同じものはない、だからこそアナログの諸事象で不変量を見出すのは決して当たり前でもなければ、人工知能にもできるような理論的できれいなものでもない。むしろゲリラ的な個別の知恵と気づきが要る。だがこういう気づきが明日の儲けやノルマ果たしに使えるのならこれは重要で、人を採用するときの能力の見極めもこういう「意外な気づきがあるかないか」に依るのが、その会社にとってもずっとありがたいはずだ。そしてさらに戻れば教育も今のような詰め込みでなくて、こういうアナログ気づきを伸ばすようなやり方にすべきだろう。

とまあここまではアナログといえども法則的に、つまり不変量的に言えるのだが、現実の神羅万象から役に立つ不変量を見つけてかつそれを形にする、これは先に「ゲリラ的」と表現したように、統一的な方法はない。逆にそんな形通りでできるつまらない気づきなど、既になされているのだ。ではどうしたらゲリラ的な気づきの能力を養えるのか、これは手間がかかるけど個別教育が基本だ。優秀な人に弟子入りして技を盗むとか、日々瞑想を習慣とするとかだ。どうしてもマス授業形式にこだわるなら、ケーススタディとディベートと言うことだろう。かなり泥臭い。

そして気づきの評価にコンペがある。コンペと言えはかつての天才のダヴィンチも随分と応募したし、現代でもクリエイティブ系の代表である芸術分野はコンペが基本だ。だがコンペ、これがまた権威と言う名の凡才がそれも多数決と言う民主主義で選ぶシステムで、きわめて歯がゆい。特に天才は決して選ばれない。もし選ばれるのなら、どうしてジョブズが追い出されたりするだろうか。ジョブズから学ぶこと、それは思いついたら自分で形にするしかないということだ。芸術の例でいうなら、芸術家は同時に売り込みもするということだ。

もしあなたが天才なら、自分で自分を育ててあとは時が来るのを待つしかない。つまり不変量の気づきにもピンからキリまであって、ちょっとした気づきなら社畜の領分でコンペでも勝つだろう。だがあまりに大それた気づきは、もちろんその方がはるかに偉いのだが、その気づきを分かせて作れるには結構の我慢と孤独とそれにいくらかの幸運が必要なのだ。アナログにおける不変性の見いだしは、それほどに深い。

#### 4、ネット左翼は無いのか

一昔前から「ネット右翼」と言う言葉がはやっているが、「ネット左翼」と言う言葉は聞かない。なぜか非対称だ。素朴にこれはなぜだろう。

一番わかりやすいのは、「ネット右翼」と言う造語を作ったのが朝日新聞だからだという説明だ。つまり朝日が目障りな右翼を撲滅するための、レッテル貼りの軽蔑語として「ネット右翼」なる言葉を作ったので、その彼らが左翼を軽蔑するためのレッテルなど作るはずがないという理由づけだ。これは一面正しいだろうが、本当にネット左翼が現存していて存在感があるなら自然発生的にレッテルが作られるだろう。だからどうも何らかの理由で、ネット上の左翼は流行っていないのだ。

ネット右翼と言う言葉には、「貧乏人の右翼」と言う軽蔑的なニュアンスがあるが、昔は貧乏人ほど左翼になったものだ。この面からも現状の右翼と左翼の力学には、従来にはなかったアンバランスが台頭したとみるのが自然だろう。そもそもその前に、今右翼と呼ばれている人々は本当に右翼なのだろうか。むしろ全体的には戦後70年を経てやっとの中道返り、本来返りと見るべきではないのか。

ネット右翼を構成する国民層、これはいろいろ言われているが、一般的には20代の若手男子と40代の子育て終了主婦が主力だという見解が多い。一言でいえば、従来ならば政治に無関心だった層だ。彼らがネット右翼に走った理由の一つとして、ネット右翼が分かりやすいという点はあるだろう。例えば「街宣車をやっているのは在日で日本の印象を悪くするためだ」とか、「日本国憲法は戦勝国による押しつけ憲法だ」とか、「左翼日本は亡国日本でこのままでは日本は中韓に占領される」とかだ。

本当の右翼は別として、ネット右翼は分かりやすくて敷居が低く、また従来の日教組教育の嘘っぽい嘘も突いていて、ちょっとした勉強ですぐに参加できかつ自分が国を守るかのような英雄的錯覚にも浸れる。これが、ネット右翼が今盛り上がっている理由だろう。昔のようにデモをしたりオルグをしたりカンパをしたりと言った面倒な手続きは要らず、またことさらに面識がなくても連帯できてしまう、これは確かにネットの功績であり、ネット右翼は時代の寵児である。しかも草の根的に大衆を巻き込んで、数で稼げて民主主義に一石を投じられる。でもそうであるならば、同じ理由で「ネット左翼」も独自に盛り上がるはずだ。

その前に今「ネット右翼が分かりやすい」点を挙げたが、本当にわかりやすいだけならそれは単なる安っぽいイデオロギーであって、右翼本来の日本を愛する魂の高揚は関係無いのではないかという指摘はありうる。そしてもしそうなら、右翼などと称しても

その低俗なメンタリティは半世紀前の左翼と変わらないことになる。だがネット右翼の発言を見ると、確かにパターン化のきらいはあるものの、全くの感動なしのプロパガンダかと言うと、彼らなりの感動や感情移入が感じられる。特に大和魂とか武士道とか万世一系とか国体護持とかに対してだ。

半世紀前に学生運動を盛り上げた全学連等のかつての左翼の闘士たち、彼らは今ちょうど65歳〜70歳くらいで、現役を退いて暇になって縛りもなくなりそうかと言って要介護になるほど老いぼれてもいないのだから、今こそ彼らが立ち上がってかつてから持ち続けた情熱を思いっきり吐き出して当然だと思われる。ところがなぜか、ほとんど何も聞こえてこない。まあツイッターやフェイスブックは若者主流だから敬遠されているのかもしれないが、現状は老人のツールであるブログ、ここでも左翼ブログはほとんど見ない。

もちろん彼ら「半世紀前の左翼」の中には、転んで資本家の手先に転向した者も多いであろう。中には官庁や大会社で結構な幹部になった人たちもいる。例えば牛井チェーンのゼンショーの社長は元闘士として有名だし、コープグループの社長も確かそうだった。ここまででなくても「名の知れた会社の部長になりました」程度の人は結構多い。その彼らが全員左翼から離脱したかという、そうでもない。

その証拠にこの手の人種が多く住む東京通勤圏、埼玉都民とか横浜都民とか言われるエリアは選挙でも革新系が強い。実はひそかに応援しているのだ。民主党にカンパなどもしていることだろう。たとえ現役時代に体は資本家に売っても、魂までは売らないぞという心構えなのだ。私もこういう経歴の人たちを知っているが、結構な経歴を持ちながらオフでロシア革命の話に水を向けると変に饒舌になったりした。こういう人たちがなぜ今ネット左翼をしないのだろうか。

かられは暇になって、昔を懐かしんでカラオケに行き舟木一夫や橋幸夫の歌を歌うとか昔を懐かしんでいるらしいが、だったら同じ乗りでネット左翼を始めるのが自然ではないだろうか。結局根本に帰ると、今左翼思想というものが全く流行っていないのだ。ちょうど今ロシアや中国で、共産主義が何千万人の人々を殺しながら何の歴史的教訓も残さずに過ぎ去りつつあるように、日本の半世紀前の学生運動も結局今振り返ると顰蹙（ひんしゆく）以外の何も残さなかった。

実にここにネット右翼興隆の理由があるのであり、かつ同時にネット左翼が盛り上がらない理由があるのだ。おそらく半世紀前の闘士たちは、その楽しかった青春を楽しいままに心の中に留めておきたくて、むざむざ白けて相手にされないことを知りながら

あえて空振りの檄を飛ばすという自滅が見えていることをしない程度には、ナイーブで賢明なのであろう。

ではそうであるとしたら、今のネット右翼現象も一時の流行であって、いずれ下火に向かうのだろうか。思うにこれが本当にイデオロギーでないのなら、彼らの主張が一応通って日本が中立化し精神的に独立した時点では、彼らの多くが納得して沈静化すると思われる。半世紀前の学生運動と違って一時的な流行とまでは言わないが、彼らの目標は日本の本来化であって、過度の右傾化ではないからだ。日本は昔から中庸の国であり、その辺はわきまえていよう。

煎じ詰めれば今のネット右翼は中韓あつてのネット右翼であり、あるいは無防備な国防という非現実な現状があつてのネット右翼である。端的に言えば、天皇陛下が「もうやめよう」と呼びかければ素直に武装解除する人たちだと思われる。

## 5、モチーフ

以前より断片的に示唆しては来ましたが、人が外部情報を理解し、判断し、行動するという典型的な日常行動で一番重要な点は、その外部情報や判断結果が、その大元になる情報や問いがたとえどれだけ複雑多岐であろうとも、究極の「理解・判断」に於いては脳内のひとかたまり（1アナログ集合）に集約されているということです。

簡単な例で見てみましょう。「うどんとそばとどっちが好きですか」という問いに関して、「どっちも好きなので交互に食べていますよ」と答えるケースです。これは極めて容易なやり取りで、だれでも日常やっていることです。でもこのやり取りに至る詳細なプロセスを内省してみると、実は以下のような複雑なプロセスを順にかつ瞬時にこなしていることが分かります。

「うどんとそばとどっちが好きですか」→うどん及びそばそれぞれの平均的かつ抽象的なイメージが浮かぶ→比較を聞かれていることを認識する→質問全体としての1つのイメージが脳空間に位置づけられる→問に答える方向で連想が働く→抽象的な答えの1まとまりが生み出され脳空間に位置づけられる→その1まとまりについて「こういう感じか」と言った感想が生成される→その感想について言葉で答えるための分解と組み立てがなされる→特にそばとうどんについては甲乙つけがたいとのイメージになっている→「どっちも好きなので交互に食べていますよ」と答える。

ここで重要なのは、問いにはそば、うどん、好きという3つの要素が絡んでいるものの、

その問いの意味が分かるということは、すなわち脳内にその全体観、つまりその問いのモチーフが全体をひとまとまりとして正しく位置づけられるからこそ分かった気になるという点です。そしてそれに対する判断も、いわば連想の結果としてひとまとまりで導出されて、現実の行動や返答はそのひとまとまりをほぐしながら行っている点です。

今の例は簡単な例でしたが、もっとそれが複雑になって小説とか絵画とかになっても、とっつきは部分理解から始めるものの、それらを組み合わせて総合していった一つの全体像が見えた時に、はじめてその小説や絵画が「分かった」、つまりモチーフが見えたとなるのです。そしてそのモチーフに照らしてその感想や反応が、素朴にはまずひと固まりとして出ます。

ここでモチーフをもう少し詳しく見てみます。ある人が地点Aから地点Bに行きたいとします。この時の経路は特に急いでいるときは最短経路でしょう。この経路はその人の行為のモチーフの極めて分かりやすいケースです。もし余裕があるときは、少し回り道をして景色を見ていこうとかします。これは遊びの部分です。でも遊びの部分が追加されたからと言って目的地が変わるわけではありません。つまり全体としてのモチーフは不変で、遊びの分だけお使いが楽しくなって、妙味が増しているわけです。これが小説や絵画の構造です。

元情報が小説の場合は、元が言葉なので心象も言葉にしやすいです。それでもその作品全体の心象のほかに、その作品の各章での心象や、逆にその作家全体全作品の心象などもあります。その意味では心象の階層のようなものもあり多少複雑になりますが、いずれにしろ言葉にしやすい関係も分かりやすいです。これが絵画となると、心象としての「あれ」は見えるのですが、その「あれ」をなかなか言葉にしにくいし説明も多々難しい。例えば下の絵を見てその心象、これはだれにでも形成できるでしょうが、言葉にしにくいしあえて言葉にするとしばしば白けてしまいます。その意味で非言語は一般に心象により近い位置にあり、芸術家の課題とはいかにして心象と直接交信できるかになります。



モチーフについて集約しますと、モチーフとは、「①一体感があってかつ②特定の情報を発していること」と言えるのではないのでしょうか。一体感がなければ情報も発せませんので、一体感は必須です。応用技としてわざと一体感をなくして、あるいは通常の人を持つ一体感をわざと外すことにより、意外さを出したり笑いを取ったりすることがあります。これが笑いの本質だとさえ思えるのですが、これすらもモチーフの存在が全体としてあるからこそその裏技となるわけです。モチーフの有無について、最終的には全体観ですね。基本技としては、①切り取りと当てはめを多方面から無数に行い②類似を同じと認識できることです。シナプスの励起パターンが似ているときにそれが「似ているから同じだ」と連想し集約できる能力です。

さらにそのモチーフの抽象や切り取りですが、その核心のみを端的に切り取ってあればいほど、つまり情報としての粒度が高ければ高いほど、その集約は優れています。そしてそういった粒度の高い抽出ができればできるほどその人の頭脳は優れています。本来はこの、粒度の観点から選抜をすべきであり、この粒度を効率よく高める教育が優れた教育、言わば帝王教育になります。

ところで以前に例示しましたが、人文分野の天才を探していた時に、シェークスピアが連想なしにポツと浮かぶことがありました。この事象には連想過程や心象の推移過程は無いのでしょうか。実はシナプスとニューロンは無意識のうちに多数種類の結合と解消を頻繁に繰り返していて、そのうちで類似パターンとしてヒットしたものが意識上に浮かぶのですから、このように具体的なプロセスが「あるけど見えない」ことはあり得ます。

最後に注意を喚起したいのですが、例えば将棋の時に棋士は、ある時は譜面を画像というアナログで見、またある時は定石つまり法則というデジタル論理で見ます。どうしてこういう異種のものを組み合わせ得るのかが、世上しばしば問題になります。実はこの問題は、研究者が従来の点集合の階層モデルに汚染されているための先入観によって引き起こされる「問題」に過ぎません。連想先がアナログだろうとデジタルだろうと、絵だろうと論理だろうと、それまでの経験の積み重ねやその場の応用力で連想力を働かせるのに、概念の階層や種類の違いなど何等の障害にもなりません。情報の階層や種類をいちいち気にしていたら、人は危険を瞬時に回避できません。

## 6、そばとうどん

先日「モチーフ」と題した記事で、

＜問1＞そばとうどんとどちらが好きですか？

という質問を例に、このような極めて容易な質問にも多数の心象プロセスが関与していること、そして最重要なのは質問を総合したひとかたまりの心象が形成されることであることを指摘した。本日はその質問を類似なものに置き換えて、その心象の在り方の変化や類似非類似を見る、心象空間の在り方を探ることにします。

＜問2＞そばとうどんとどちらが嫌いですか？

そばの一般的イメージとうどんの一般的イメージ（デジでもアナでもない混合中間系）が浮かぶ→嫌いって聞かれてもどちらも好きなのだよな→変な質問だけど一応答えるのか→変な質問には変な答えが適切だ→この感じを言葉に展開する→どっちも好きだから嫌いと言うことはないのだよ。

＜問3＞そばとうどんとどちらが黒いですか？

そばとうどんの一般的イメージが浮かぶ→味じゃなくて色かよ→そんなことを聞いて意味があるのかな→見たとおりだよな→ここは素直に答えて良さそうだ→そばです。

＜問4＞そばとうどんとどちらが明るいですか？

そばもうどんも食べ物だよな→食べ物に暗いとか明るいとかあるのかよ→質問の意図が分からないな→単にわからないのだよ→すみませんが何を聞きたいのでしょうか。

＜問5＞そばとうどんとどちらが長いでしょう？

そばとうどんの一般的イメージ→確かにどっちも細長い形をしているな→でもどっちが長いってそういうことを考えたことはないな→最近食べたそばとうどんを具体的に思い出してみる→やっぱりどっちかが一方的に長いというのはないようだ→甲乙つけがた

いという心象だな→どっちも同じくらいじゃないですか。

＜問6＞そばとうどんとどちらが高いでしょう？

そばとうどんの一般的イメージ→物からして背の高さということはあるからここは値段だろう→スーパーとかで売っているそばとうどんのイメージ→たいてい並んで売っているけどどちらかが高いということがあったかなあ→どちらを買うかを値段で決めたことってないよな→値段はそうそう変わらないのでそば粉が入っているそばのほうが割得ですかね。

＜問7＞そばとうどんと一番好きなのはどれですか？

2個の比較で「一番好き」とはどういう質問だろう→思うにこの質問は「麺類で一番好きなもの」を聞いているのだ→麺類といえばラーメンとかスパゲッティとかチャンポンとか色々あるよな→これらを比較するとラーメンが一番多種類で面白いな→この感じを他人にもわかるように整理して答えよう→一番好きな麺類を聞いているならそれはラーメンです。

＜問8＞そばとうどんでどちらが胃に良いでしょう？

そばとうどんの一般的イメージ→胃に良いというから食べ心地に関しての問いだな→食べた感じを思い出そう→どちらも病人食じゃないか→「どちらも胃に良い」では答えにならないのかな→強いて言えばうどんかな→どちらも胃に良いですが強いて選べばうどんです。

＜問9＞どうして立ち食いそばや夜泣きそばはあるのにうどんはないのでしょうか？

立ち食いそばや夜泣きそばは聞くなあ→言われてみると立ち食いうどんや夜泣きうどんとは言わないな→これは質問というよりも気づきの自慢ではないのか→ならばこちらでも鋭い変化球で返さないと負けだな→あれこれこれらの店では普通にうどんも出してくるぞ→と言うことはネーミングでそばのほうがうどんに勝つ場面があるということか→「夜泣きうどん」と「夜泣きそば」・・・夜泣きそばのほうが短くて言いやすいな→でもそばのほうが目立つとか始まりはそばのみだったとかそういう可能性もありそうだな→ここは単純に答えよう→夜泣きそばのほうが言いやすいしインパクトも強いからではないでしょうか。

＜問10＞互いにそばとうどんの良いところを言い合ってください。

そばの方がそば粉の分だけ得なのだよ→そんな余計なものよりうどんの潔さを見ろ→単なるメリケン粉じゃないか→細ければ良いと言うものではないのだ→太ければ良いというものでもないだろう→「うどん県」と称する県もあるほど流行っているのだよ→

そばは日本中にあるからことさら県の名前なんか不要だね→そばなんてやせた土地の耕作物じゃないか→そばにはルチンと言う健康物質が含まれているのだよ→うどんは平安貴族も食したのだよ→親孝行はそばを出すね→（永遠に終わらない）

まあこう見てみますと、同じそばとうどんでも、質問の観点が少し違うだけで、使うロジックや頭に浮かべるイメージはかなり違ってきます。それだけ連想のタグが多様だということで、こういう多様なことを覚えて使えるようになるために、日々の多様な体験と教育、そしてそれらの反芻過程が必要だということでしょう。

それと併せて、どの質問でも究極にはひとかたまりの心象が形成されて、それからひとかたまりの解が導出され、それをほぐして答えとするというプロセスが見られます。ただそのひとかたまりが脳空間のどういう位置にあるのか、それらがうどんやそばの位置とどういう関係になるのか、問の心象と解の心象の位置関係はどうなっているのか、似た質問（例えば「ラーメンとスパゲッティではどちらが好きですか」）と心象の位置関係は近いのかといった問に対する答えは、まだ今後の検討を要します。

## 7、初等幾何を超えた所

ユークリッド幾何あるいは初等幾何、中学と高校で習う円と三角形と補助線の幾何である。これは形や空間認識という日常生活にも重要な脳トレに正面から取り組んでいる、きわめて価値の高い教育科目である。ノーベル賞を受賞した福井健一先生も、幾何の重要性をしきりに訴えていた。

ところがこの幾何、大学ではもう習わない。理工系の基礎数学で習うのは代数（線形代数、群論、行列）と解析（微積分、特殊関数論等）であり、幾何はない。数理科学を専攻してもそこで習う幾何とは、多様体と言う一種の貼り合わせに対してホモロジーやコホモロジー等を用いる、むしろ代数学である。その結果として高等数学での幾何学は高次元ではあるものの、実世界の形にはかすりもしないし、何らの洞察力の養成にもならない。単に、「式を変形したらそうになりました」というだけの成果だ。

こうになってしまう原因は初等幾何の方にもある。以前にも指摘したが、円と三角形に関する定理や問題は結構な数ほど存在するものの、これをちょっと拡張して楕円とか四角形にただけで、あるいは球や直方体にただけで、ほとんどの定理や問題が成り立たなくなってしまうのだ。初等幾何と呼ばれる所以でもあるが、三角形と円のみではほとんどお遊びの世界で拡張性や現実性や柔軟性に乏しすぎる。それゆえに、幾何を幾何として正面から扱いかつ深い洞察を要して学問的価値も高い「高等幾何」

なるものは存在しない、少なくとも見つからないのだ。

とするならばその高等幾何の地位を現に占めているものは何であろうか。形の洞察眼を我々人類はどんな手段で学んでいるのであろうか。それはデッサンやクロッキーや下絵と言った線画である。ユークリッド幾何の直接その先に来るものは、ホモロジーではなくてデッサンなのだ。デッサンやクロッキーはもちろん多角形や丸以上に自由な、しかし黒い線の集合体であって、その意味で形と言うものを素直に受け継ぎ発展させている。もちろん強いて言えばその前に、子供の線画や無意味なボールペンの書き試してみたいなものもあるが。

デッサン系とは違うもう一つの拡張例として、家紋や紋章、あるいは漢字や文字一般がある。これらは少なくとも日本ではことごとく黒く、かつデッサンよりも抽象性や対称性を重んじていて、その意味ではより初等幾何に近く、研究対象にもなりやすい。そしてそのさらに先には水墨画や書道の世界がある。ここでは線の太さや濃さや造形のありよう、あるいは空間の開け方等も重要になって、芸術としての多様性が出てくる。そして子供の線画やありふれた家紋といった、初等幾何のわずかな拡張の段階で、もはや証明とか論理とか定理は存在していない。

更にこの先に、色や絵やテクスチャーや立体と言った拡張がある。そこには志野や織部と言った様式や法則はあるものの、証明等の対象とは全く無縁である。ではそこには何があるかと言うと、形や色や絵やテクスチャーすべてを含む、全体感としての美である。もはや証明や学問つまり当たり前の世界を脱して、創作を主体とするクリエイティブ系の世界になっている。もちろんそこにでも美学とか芸術史と言った学問はあるが、これらの学問はあくまでも蓋然的である。これらの分野は初等幾何以上に形がギラギラしているが、それでも証明の対象ではない。なぜ志野の傑作の銘「振袖」が美しいのか、これは直観で感じるものであって証明すべき事項ではない。

これらの傾向は何を意味するのであろうか。それは、「初等幾何の拡張に当たる世界はあっても、学問対象としては初等幾何の段階で終了している」と言う事実だ。そしてこの、「学問は子供じみた段階で終了している」と言う事実は、実は初等幾何に限らず学問のあらゆる場面で見られる、学問に共通の限界である。現実には学問では語れない、その意味で学問手続きは決して万能ではない。その理由は2つあって、①世の中は法則で片が付くほど単純ではない、②世の中の判断は常に不十分な情報に基づいて、したがって再現性を期待できずに行われる、である。

実際に、芸術等のクリエイティブ系の作動原理を見てみよう。そこで大切なのは美と

面白さであり、面白さとは過去に例がなく全く新奇な次元にあることだ。これは科学手続きの要諦である絶対再現性と、真っ向から対立している。端的に言えば、根拠があって再現出来て法則通りの芸術などくそつまらないのだ。もちろん数学や学問に美や面白さを感じる人もいる。だが同じ「美と面白さ」と言う言葉で表現しても、その内容は全く異なっている。集約すると「科学が終了したところに芸術がある」、これは重要な法則である。

ただここで注意したいのは、線画や家紋や書道の段階になるとそこにはもはや論理はないが、だからと言ってこれらによって脳が全く鍛えられないかというと、決してそうではないということだ。優れたデッサンや秀でた書道によって人の脳は大いに刺激され、その刺激の中には感動だけでなく納得と言うものがある。納得とは、そもそも別々であったものがつながったときにおこる脳の発火作用であって、これは論理脳に極めて近い。そしてこの納得は、対象とする世界が絵画や彫刻や陶磁器ほど多彩になってもなお強くある。つまりより良い作品を多く見ることは、審美感のみならず論理脳も、つまりアナログだけでなくデジタル脳も養うのだ。

そういう風に捉えれば、絵画や芸術の方が数理科学よりもユークリッド幾何のまっすぐ先にあるという見方も、納得できるのではないか。

## 8、虚無僧

虚無僧（こむそう）、日本独特の宗教風俗である。武士でありながら同時に僧であり、編み笠をかぶり尺八を吹きながら裏通りを流し歩く。武士であるから刀を差し、僧であるから袈裟を身につけ、「明暗」と墨書した箱を下げて何やら怪しげに村を回る。時代劇ではよく、ラッパ（密偵）のカモフラージュとしても描かれるが、いずれにしても身上や得体は知れない。

何よりも尺八の渋い音が、いかにも日本人好みのわびさびを感じさせて深くも物悲しいうえに、その無駄のない動きがいかにも武士道を心得ており、悟っていて無駄がなく格好良い。身分にも所属にも何にも縛られず、ひたすら自由である。私のように根からの自由人は、この手の人種に大いに憧れる。

この虚無僧、宗派的には臨済宗（禅宗）の普化（ふけ）と言う僧が始まりのようだ。臨済宗と言えばただ座るだけではなくて一休頓智話でも知られるように公案禅、つまり理性の執着を外すためにおよそ謎めいた問答を用いる宗派である。無門関（むもんかん）とか碧巖録（へきがんろく）は公案の書として有名である。

公案は、悟りには邪魔な分別や理性を外すのが目的だからその問答はおのずと風狂で、素人目には気が変になったとしか思えないようなやり取りやしぐさをする。その一例を無門関の「南泉斬猫」(なんせんざんみょう)と言うお題を例に見てみよう。

ある時和尚が寺に帰ってみると、弟子たちが猫の取り合いをしている。怒った和尚が「仔細を答えないと猫を切るぞ」と脅かすが、誰も答えられないので和尚は猫を切ってしまう。その夜に高弟が来たので次第を話すと、その高弟は草鞋(わらじ)を頭にのせて去っていった。和尚は「お前が居たなら猫を切らずに済んだのに」と悔しがった。これ如何。

まず取り合い、これは執着だから僧としてはそのイロハすら出来ていない。和尚が怒るのは当然だ。だからと言って和尚の殺傷は殺傷戒に反していないか。反してはいるがもっと大切なことを教えるためには必要だ。その程度の事の重篤も判断できないような硬直した宗教なら、無い方が良く。さて、では高弟が草鞋を頭にのせて去っていき和尚もそれを良いとした、これの風狂なやり取りをどう読めば良いのだろうか。草鞋とは足の下に履くものである。これに異論のある人はいないだろう。だがそういった硬直した凡庸な常識こそが、実は悪しき執着の大本なのだ。草鞋を頭にのせる程で初めて執着から解き放たれている。

では普化の公案のやり取りはどうだったか見てみよう。師が死に際して「私の像を描けるものは描いてみよ」と言った時に、普化だけが宙返りをして去っていったという。またある時は「一本の髪の毛が大海を飲み込む、これ如何に」と問われて、普化はいきなり食卓を蹴り倒した。そして「なんと乱暴な」と諷められると、「仏法に穏やかとか乱暴とかそんなものがあるか、このド阿呆」と怒鳴り返し、風来坊のごとくに勝手にどこかに行ってしまったという。

普化の公案は大悟徹底している。彼の悟りに比べれば先に引いた「南泉斬猫」など、悟っているようでまだ「自分は僧である」と言う意識を捨てきれていない。普化は最高の教科書ですら、教科書など死ねと言って破り捨ててしまっているのだ。確かに大悟徹底しているが、ここまで風狂だとおよそ人の理解は得られない。あるいは風狂でありさえすれば、どんなしぐさも正解になってしまうほどだ。

ここで普化がその並外れた天才性ゆえに教えていることは最高の悟りであって縛りが無く無上の自由の境地である。しかし皮肉にも、最高の悟りとは規律がなさ過ぎて、実は正反対であるどうしようもないごろつきと一見紙一重だ。事実上は抱き合わせに

なっていて、愚かなごろつきさえも印可してしまう危険を孕んでいるということだ。

そして歴史を見ると、虚無僧にもそういう時代があった。虚無僧は武士でありかつ僧であるという特権から寝泊り自由、つまり勝手に泊まって宿泊料を払わなくても良いとされた。また尺八に対して一ひねりお布施をするのが善行であるという習慣があった。そして虚無僧は天下往來自由で所属する寺の取り締まり等はなかった。そこでこの特権を利用して勝手に虚無僧と自称して寝所や路銀を強要する不届き物が多数表れて庶民に迷惑がられ、ついには公儀の取り締まりを受けることになる。明治政府は早々に、虚無僧を修験道とともに禁止とした。

似たような例は高野聖（こうやひじり）にもある。高野聖と言うと真言宗の高僧を指すかに聞こえるが、実は諸国に派遣された身分の低い流浪の伝道師たちで、伝法や説教もしただろうが生業は行商、つまり基本的に商いであった。そして彼らのいくばくかは事実上の押し売りを行い、逆にごろつきが高野聖と自称して狼藉を働くこともあり、やはり庶民に敬遠された。

ここに根本的な難しさがある。素晴らしい行いは自由がないと出ないのだが、その自由の究極である無管理は結局のところ、やがて混乱し低俗化して滅びる運命にある。これは米国のヒッピーもたどった道だ。だから宗教はどこでも、内部の位階が会社以上に重要視される。これは宗教本来の目的に照らせば皮肉以外の何物でもないが、でもはみ出し者を指導し除名する規律がないと結局は無政府主義のカオスになってしまう。ちなみにアナーキズムを虚無主義と訳すのは虚無僧からの造語である。普化もこれを見通していたのか、自らは宗派を形成しなかった。

さて、現代になって尺八と虚無僧の理念は見直されて、自ら尺八を楽しむとか、あるいは虚無僧になって自由な悟りを目指す人が増えているという。普化や虚無僧の理念はある意味皮肉なことに、無宗教である合理主義が極まった現代においてやっと正しく理解されるに至ったのである。尺八の渋い振動音は素朴に座禅ほどの力を持つと私も思う。

（注：武田鏡村著「虚無僧、聖と俗の異形者たち」を参考にしました）

## 9、科学的手続き

ある人が街を歩いていて急に腹が渋った。困ってふと見るとそこに市役所がある。彼は駆け込んで「トイレを貸してください」と頼んだ。すると係の人が「それではこの書類

を埋めてください」と言う。彼は一刻をも争うので苛立ちつつも「トイレを使うのに書類が要るのですか」と聞くと、係の人は「公共的な什器の使用なので申請が必要です」とのこと。彼は仕方なく書類に住所や氏名、使用対象や使用目的等を書き込んで係の人に渡しトイレに飛び込もうとすると、「すみません、大ですか小ですか？」「大ですう！」「それでは書類が違います、こちらの書類を埋めてください」。

まあ、お役所の手続きとはこういうものだ。書類の耳がそろっていて罫が漏れなく全部埋まっていればそれで良く、なぜその書類が必要かとか記載事項が真実かなどは二の次、ましてやその書類が本当の要点を聞いているかなど全くの問題外だ。1つでも書き漏らしがあると全滅と同じくらいだめでやり直しになる、これがお役所に限らず手続きすべてに共通の法則だ。

最近米国の研究所で、重力波が観測されたと話題になった。一歩先を越されたが、日本でもやはり重力波測定装置が建設されていてまもなく稼働する。重力波はアインシュタインの一般相対論から予言される現象で、質量によって空間が曲げられその曲がり波のように伝播するという現象だ。この測定に成功すれば相対論がさらに盤石になり、ダークマターの存在証明等に寄与できる。ノーベル賞間違いなしの実験ともいわれている。

実験の原理は、長い真っ直ぐなトンネル(2km)を2本直角に掘り、共通の光源から両方のトンネルにレーザー光を同時に飛ばし、「戻る光にずれがあればそのずれは質量による空間のゆがみのせい」と言うわけだ。だから実験自体は十分な輝度と精度のレーザーさえ実用化されればさほど難しいものでなく、そして現にそのようなレーザーが出来たということだ。

そして戻り光のずれによる干渉縞が見いだされて、「ハイ出ましたよ、万歳ノーベル賞」と言うわけだが、そもそも一般相対論が提出されたのはもう100年も前の1916年、丁度第一次世界大戦のころだ。それ以来理論観測両面から検討が山ほどなされ、マイケルソン・モーレーの実験から始まって、重力レンズ効果、水星の近日点の移動効果等々、これを肯定的に裏付ける事実は沢山出ていて、今時相対論を疑う人などほとんど居ない。

にもかかわらず、「人造の実験装置での直接観測が無ければ科学的には十分といえない」と言う手続き上の理由で、ほとんど成果が約束された実験を何千億円もかけてやって、「実は意外な結果でした」ならまだ税金のかけ甲斐があったものを、「予定通り出ましたのでノーベル賞をください」、これどこかおかしくないか。もちろん「まだ絶対

ではない」と言えばそうだが、それを言い出すなら明日太陽が昇るのは絶対なのか、明日絶対に地球が割れないと言い切れるのだろうか。世の中には「念のための絶対」よりもずっと重要なものが沢山あるのではないだろうか。

ここ100年の教育の効果があって、世界はもとより日本でも科学は神扱いだ。科学は絶対で万能で至誠至大であり、非科学を消し去ることが人類の使命みたいな雰囲気蔓延している。確かに欧米が科学技術力で世界中を植民地にした実力と実績を振り返れば、「科学おそれるべし」と膾（なます）を吹く気持ちも分かるし、「科学＝根拠」だからその手続きが完遂されたときの確実性も高いだろう。だが、「世の中にはどうしても根拠がないけど決断判断しなければならないことが山ほどある」という現実を鑑みると、科学の大本である「絶対根拠」や「絶対再現性」は実は同時に縛りでもあって、科学といえどもあまたある手続きの一つに過ぎないことが見えてくるのではないか。

そしてその手続きの一つとしての科学だが、手続きである以上は形式的完璧性が要求される。ひと糞でも書き漏れがあると大きな穴なのだ。その漏れはどんなに些細なことであっても許されない。この潔癖性が端的に表れたのが今回の重力波騒動である。もちろんこれが数十万円で気が済むというのなら、あるいは勝手にやってもらっても良いかもしれない。ところがそれが「実験設備の建設や運営に数千億円必要でござい」と言うことになると、「手続きのために数千億円かよ」と言う気になるだろう。

とは言え科学事大主義の立場に立てば今回の観測は快挙であって、ノーベル賞はかなり確実だ。確実な理由は①手続きをちゃんとし終えたと言う「良い子ちゃん」加減と、②予定通りなので「呉れてみたら間違っていた」などと言う恥ずかしい失態はあり得ない、の2理由による。賞をくれる方だって、賞の権威を保つためにはプライドが要るのだ。

世の中、ガリレオのころは科学を言うと異端審問される怖い時代だったが、彼らの努力によって科学至大のルールが一旦引かれた今となつては、この科学的手続きに従って一切ふれずに、論文生産機と言う一種の社畜になることが、最大の保身でありかつ俗物がちょっと威張れる道なのだ。

もう、いずれ誰かが早晚やっていくところまで行きつくことが約束されている科学だが、家具のニトリの創業者は「出来上がったものはつまらない」がモットーで、この言葉に共鳴した畑違いのある学生が当時まだ地方の無名の会社であったニトリに入社し、今回社長になるそうだ。神聖な科学と金儲けを並べると頭に湯気を立てて怒る御仁も多いだろうが、もしあなたが天才なら科学はもう終わっている。

## 10、翻訳で見える意味分布

意味の本質は心象であって言葉にすると嘘になるのであるが、その言葉に頼らないと交信や記録化ができないという矛盾をあえて前向きにとらえて、本日は翻訳という行為を通した意味分布のありようを見てみたい。

その例として今回は、「大人になれよ」という日本語独特の呼びかけを挙げてみる。その意味するところは、「細かい悪には目をつむって融通よく要領よくやろうぜ」といった感じである。感じ先行の言葉だから、機械翻訳では限界があることが予想される。

まずヤフー翻訳だと”become an adult”と出てくる。まあ「大人」は第一義的には”adult”だからまったくの間違いではないが、直訳過ぎて意味は通じない。言葉の意味単位と単語の単位は異なるのだ。次にビング翻訳だと”learn to grow”と出てくる。こちらの方がより近くて、総体としての意味が通じる。人がその意を汲んで訳すならば、”be flexible”（柔軟になれよ）あたりだろう。つまり「大人」と「柔軟」、日本語単独で取り出すと直ちには連想できない程度に遠い言葉が、翻訳という言語分布の異なった網を通して見ると実は結構重なる部分があるのだ。

冒頭にも指摘したように言葉は一般に大なる情報の減損であるから、翻訳あるいは要約という行為は奇跡的に良くできても減損なし、大抵は「翻訳は嘘つきだ」というイタリアのことわざが成り立つ。ところがあえて知恵を使って直訳を避けることにより、デフォルメ画のように感じを鋭く出せる場合がある。一種例えにも似ている。そんな例をもう一つ挙げよう。

翻訳家の戸田奈津子さんが、映画の「クレイマー&クレイマー」の一場面を見ていた時である。元夫が友人に、分かれた際の気持ちを「後悔しないの」と聞かれたのに対して、夫は英語で”more than often”（とてもしばしば後悔するよ）と答えたが、これを字幕では「悔しいけどね」と訳されているのを見て感動したという。「とてまする」と「悔しい」、日本語の意味分布ではおよそ重なると思えないこの組み合わせが、その心象に立ち戻ると極めて効果的にど真ん中に写像されている。この事実は、言葉の意味分布が決して単純でないことも同時に象徴している。

あるいは宇宙衛星について、「現在は芸術レベルだがこれを製品レベルまで落とさないと商業化は難しい」。この表現は芸術品と製品という2つの言葉をうまく対比させて、現在の人工衛星の立ち位置を一言で表している。言葉の巧みな使い方の典型例で

あるが、こういう場合の個々の言葉の心象空間での位置関係はどうなっているのだろうか。

元の「大人」の例に戻ろう。大人を使ったフレーズはまだほかにもあって、例えば「彼は大人だ」、これは「大人になれよ」という勧誘が成功した結果であるから He is flexible.”でも良いのだろうが、機械翻訳だとどちらのソフトでも”He is an adult.”と出てくる。つまり機械翻訳ではニュアンスまでは出せない。人が心象で訳すならば”He is wide-minded.”とかだろう。あるいは”He is a big man.”でも良い。これほどに心象の襞というものは複雑で、一筋縄ではいかないのだ。この複雑性はアナログ集合に足を踏み入れた時の法則の見えない乱雑さ加減や泥臭さの象徴であり、また文学や芸術における天才の妙味の象徴でもある。

大人の別の方面での応用として、「大人しい」という言葉を考えてみる。子供と正反対に泰然自若としている、落ち着いているといった感じだ。人が英語に直すならばまあ”He is a gentleman.”あたりか。ところがこれを機械翻訳するとどちらのソフトも”He is quiet.”と出してくる。これだと「彼は無口だ」あるいはもっと「ぶっきらぼうだ」といった感じが強く出てしまう。この例など丁度良い訳語あるいは写像先がない例だが、この言った迷走はむしろ多くて、翻訳をするときに悩む場面だ。

もちろんこれと逆向きのケースもある。「大人」に対してど真ん中の”adult”の派生語である”adultery”、これは不倫という意味になってしまう。日本語で大人と不倫が重なっているとか近いとは思えないが、翻訳の網を通して見ると、意外に近いのだ。

このような複雑に入り組んだ状況を見てくると、アナログ集合と一口に言うもののそのありようは一筋縄ではいかない。そもそも現実が一筋縄でないのだから、それをできるだけ忠実に表現しようとすればおのずと一筋縄ではなくなるのだが、言葉の意味や心象を学ぶときにいったい何をどうやって学べば良いのだろうか。「コツコツと状況を一つ一つ消化していく、法則性の全くない迷路を一生重い荷物を担いで歩き続けるしかない」であるかの絶望感に襲われる。

確かに高度な技能や目標を持った人は口をそろえて「生涯現役」というから、「ここで終わり」ということはないのであろうが、他方で「経験を重ねて成長する」という面も強くある。つまり経験は単に数ではないのだ。よく、「地獄を見たからには何も怖くない」というが、これは経験が大きいほどその場合のみならず似た場合にも広く応用できることを示している。ここでも最終的に、「アナログの法則とは似ているものに応用できるということだ」という決定的な不変量が出てくる。そして今の翻訳の例から見てくると、

それは「意外なところに類似性を見いだせる人ほど優れている」という、能力の本質である。

#### 11、夢と解釈(その4)

今までに「アナログ集合」(基本単位が点でなく連続体)の観点から、その典型的な具体例である心象とその推移について見てきました。この観点から言えば夢は、常識からもフリーな、モチーフからもフリーな、そしてメッセージからもフリーな、どんな束縛からも自由な究極の心象の生起と推移であると位置付けられます。

<夢1>私は骨董品修理技能者だった。とあるきっかけで、しょうもないガラスの一升瓶の修理を依頼された。その一升瓶はなぜか、たぶん熱変形だろうが周方向にきれいに切れていた。そこで間に接着剤を挟んで両辺をくっつけた。数時間後に見るとうまくくっ付いていたが、少し経つと別のところに周方向の亀裂が入って2個になってしまう。こういうことを数回繰り返しているうちに、私はついに嫌になった。するとそのとたんに瓶が私の手をすり抜け、くっつけたところがすべて外れて、ばらばらになって落ち砕けた。

<解釈1>「努力は報われる」なんて嘘です。

<夢2>私はとあるぼろな社宅に住んでいた。社宅の入り口に「文化部に協力できる人は技能を書いてください」とあったが、「うちは東大の五味先生が委員だから任せておけば良いよ」などと誰も書かない。「あんな偉い先生がうちの委員かよ」といぶかしがっていると、ご当人が本当に会議室に入っていく。首をかしげているとマイクロバスが何台も横付けされて、乗るように促される。そして乗って着いた先は教会だった。「ちえ、教会かよ」とがっかりしつつも中に入ると、そこはなんと酒池肉林の豪華な宴会場だった。説教も讃美歌もなくただ食べれば良いだけだ。もう山ほど飲み食いしたがまだ半分も食べていない。どうしたら良いのだろう。ぜいたくな悩みだ。

<解釈2>教会って本当は素晴らしいところだったのですね。

<夢3>私はどうも目黒あたりに出掛けたい。ところが帰ろうとして帰り方を忘れしてしまった。何とか電車で自由が丘あたりまではたどり着けたが、確か京浜急行線に乗り換えるはずなのにその線がない。あれ、おかしいな。そういえば「自宅は緑が丘駅から歩きだったよな」とか思い出して再度電車に乗ったが、今度は田園調布に着いてしまう。自分の家がどこにあったのか、朝に目黒までどうやって行ったのか、数時間前のことなのにすっかり記憶から脱落していて、まるで思い出せない。「大変だ、これは夢なんか見ている場合ではない」と思い、ついに起きてしまった。ところが起き

でもまだ自宅への帰り方を思い出せない。ウウンと唸って思いっきり頭をフル回転させたら、しばらくたって、「よく考えたら自宅からはまずバスだったよな」とか思い出し始めた。数十分間、私は本当にぼけ老人だった。

＜解釈3＞人はこうやってぼけ老人になっていくのですね。

＜夢4＞私は社畜が心から嫌になっていた。腹いせに社長がかわいがっている犬を蹴ったら告発されて、死刑を宣告された。社長のご恩情により、「小豆の詰まった布袋を切って無事に小豆がこぼれ出たら無罪にする」と促されたが、もう人生がばからしく空しくなっていたので、この提案を無視し家族に別れを告げて縛り首になった。

＜解釈4＞何度川に飛び込んで死のうと思ったことか。

＜夢5＞私は彼女が欲しいばかりに、バカブスで性格の悪いS子を彼女にしている。明日で学校も卒業だと言うのにS子は何もやってくれない。そして翌日の学校最後の日、利口な美人で奥ゆかしいT子が楚々とやってきて、私の持ち物を全部片付けてくれた。周りの友人たちも祝福の拍手をしている。

＜解釈5＞ほしい物って焦らなくても時が来れば自然にやってきて、しかもそれが最高のですね。

＜夢6＞携帯を持っているのに、なぜか外の公衆電話をかけに行ったが繋がらない。仕方ないので携帯でかけようとしたら、携帯がない。おかしいのでその辺の家に上がり込んで、携帯を返してくれと文句をつけた。その家の人は親切にも家にありったけの電話を持ち出して貸してくれたが、どの電話でかけても別の用もない昔の知り合いたちにしか繋がらない。どんどん当初の目標から遠ざかっていく。

＜解釈6＞その辺の家の人が意地悪だったらどうなっていたのだろう。

＜夢7＞神道になぜか儀式があって、木刀で殴られて気絶して覚醒した後に異言を言わないと入信できない仕組みになっていた。私はすでに中核信徒で、神主の脇で木刀を振る係になっていた。入信希望の爺さんを教祖の命令で気絶するまで殴って、何度目かの振り下ろしで見事命中。爺さんは気絶した後わけのわからないことを言って、見事合格した。

＜解釈7＞爺さんおめでとう。それにしても宗教なんて幹部でもいやだな。

＜夢8＞国政が解散と内閣総辞職もやむなしという機運になっている。私を含め支援者たちが男も女も心配そうに集まってくる。だが面々をよく見ると、お笑いや漫才師ばかりだ。そして雰囲気もお葬式というよりお祭り臭い。そうこうしているうちに現職の大臣が男女2人、神妙な面持ちでやってきて我々に、「辞職願はどう出すのですか」など

と頓珍漢なことを聞く。よく見ると男の方は鳩山由紀夫で女の方は上沼恵美子のように。誰かが「総理大臣室にビニール袋が下げられているからそこに投げ込むのだよ」と適当なことを言うと、大臣たちはそれを真に受けて行ってしまう。さてその後は吉田類もびっくりのドンチャン騒ぎの大宴会になる。私は「これで本当に良いのだろうか」と素朴に疑問に思いつつも、やっぱり宴会に参加している。

<解釈8> 理屈なんかどうでも良いからドンチャン騒ぎですね。

<夢9> 「稚内から与論島に重力波を打ち込むことにより重力波の伝播現象の再現に成功しました」というニュースが伝わり、国民は「ノーベル賞だ！」などと大いに沸いている。しかも成功したのが、原子力委員会をつぶしたあの班目（まだらめ）先生の研究グループだという。「それってでたらめじゃないの」とか私は思いつつも、私はただ首をかしげるのみであった。

<解釈9> やっぱりノーベル賞はペテンだ。

どうですか、モチーフレスで常識レスだったけど、まったく無意味とも言えないでしょう。

## 12. ブラック企業

今はちょうど就活シーズンですがブラック企業、「社員は敵だ」がモットーの経営者が経営する、若者を使いつぶして「ウツは使えない」という理由で辞めさせ、その一方でリクルーティングだけは口先の嘘で固めたノルマと嫌がらせとサービス残業の会社で、大きな社会問題になっています。こんな会社が横行していること自体が、「アベノミクスの言うバラ色はどこにあるのか」と素朴に疑問になるご時世ですが、現に就職難である上に企業の側も厳しい収益競争にさらされていてどこもいずこも余裕がない、特に中小企業など「社員から分捕るしかない」と言う現状です。

というわけで私は先日、市の労働系外郭が主催する「ブラック企業の見分け方と対策」という講座を受講してきました。講師はその道で活躍している弁護士です。お話は、①派遣労働の意味と価値がリーマンショック以降まったく変わった、②労働者に占める正社員の割合はもうじき半分を切り基幹的業務も非正規になる、③残業や社会保障の表記に嘘や騙しが多い、④大抵のケースは裁判すれば勝てる、④怪しいと感じたら行くな、ということでした。まあ、弁護士の視点からはそうでしょう。

「怪しいと感じたら行くな」とか「労働組合のない会社はダメ」とか言われても、それはそれでごもつともではありませんが、早慶レベルですら全員が名の通った会社に入れないのが現実です。ましてや一般の大学生は「少くく危なそうでも派遣社員よりは

マシそうだから」という理由で、当たるも八卦で内定をくれた会社に入るしかないわけです。少なくとも50社も落ちるとそういう気になります。もっと現実を見てくださいと言いたくなりました。

その帰り道にふらっとブックオフによると、「うちの会社ブラック企業ですかね？」という題の漫画雑誌が売っている。パラパラ見てみるとなかなかリアルで面白い。中古で安いしその割に汚れていないので、つい買ってしまいました。

振り返ってみると私が新入社員だった昭和末期、オイルショックよりは後でしたがまだ日本の経済は右上がり、人件費も高くないし円ドルレートも低くて、あの頃もサービス残業が当たり前で夕食を自宅で食う方が珍しかったのですが、なぜか今の方が悲惨です。日本もいよいよ終わりつつあるのでしょうか。

というわけで本日はその、「ブラックですかね」の本の24のエピソードのうちからいくつかの事例を要約で紹介してみたいと思います。

(1) 悪徳先物会社:「金融の未来をリードするプロ集団」という売り込みで、会社説明会はきれいなお姉さんを借りてきて豪華だったが、入ってみると全部ウソ。きついノルマで善人をだましてなんぼで、3年以上残ったわずかな社員は全員ウツ。

(2) キャビンアテンダント:いわゆるスチュワーデスでアナウンサーに次いで花形と認識されているが、40過ぎのおばさんをハードな仕事でやめさせるためにわざとこれに配転させる。客の露骨にいやそうな顔もつらい。

(3) ファストフード店員:昼と夜の忙しい時だけ労働時間であとは非拘束という建前で、給料は実労働分しか支払われないが、実態は12時間拘束。

(4) 英会話学校講師:英語でキャリアアップというたい文句だが、アジア人は使い走りのみで、外人顔でないと講師になれない。おまけのこんなところの講師になる外人はいい加減な奴らばかりで、その尻ぬぐい(家賃の踏み倒しとか)ばかりやらされる。

(5) 大学キャリアセンター職員:一応食いはぐれはない職だが就職率というノルマがあり、B級以下の大学は企業も嫌がるので、就職率を上げるためにブラック企業と知っていても勧めるとか、バカと知っていても大学院に行かせて学費をさらにむしる方にもっていく。

(6) MR(医療情報担当者):これも知的に聞こえるが、実際は落ちこぼれのエロ爺さん町医者芸者みたいな仕事で、宴会とかゴルフの付き合いばかり。

(7) 不動産販売会社:モールの設計などができそうに聞こえるが、実はバブル前の売れないくそ田舎の、倒壊リゾートマンションに住み着いたホームレスを、防毒マスクをつけて追い払うような仕事ばかりだった。

(8) 訪問リフォーム業者:リフォームは流行というイメージだが、ぼけ老人のぼろ屋を

狙って「シロアリに土台がやられている」などと嘘をついてリフォームの契約書に判を押させるのが仕事。老人の方も良くしたもので、リフォームが終わったころにはすでに死んでいた。

(9) 消費者金融:「大手金融業」などと称しているが実は高利貸し。「3人殺して1人前」などと言われ、バカバカ貸して裏で生命保険を掛けておく。リスカ(リストカット)、ブラサガリ(首吊り)、ホース(排気ガス吸い込み)、ミドリ(硫化水素死)等は日常の業界語。返せないところにはやくざを送る。

(10) 仏壇販売会社:この程度の業界で腰が引けていては就職などない。面識の全くない葬式にちゃっかり上がり込んで、悲しみと動転に付け込んでちゃっかりと安い仏具をバカ高い値段で売りつける。

(11) 輸入品訪問販売:エコ先進国の最先端商品ですなどと、しょうもない浄水器を10万円で売りつけたりする。そもそもピンポンして戸を開けてくれるとか電話をガチャッと切られないのは100人に1人くらい。開けてくれたらその家の水道水に試薬を入れて変色するのを見せて煽る。時に高値がばれることもあるがその時は姿をくramsすように仕込まれる。

まあこう見てくるとどのケースも多分に、特定の業界に特徴的と言うよりはどの業界にも当てはまる態様です。かなり危ない業界としてはIT業界(SE)とか飲食業界(接客)とかがよく挙げられますが、絶対大丈夫な業界というものは存在しません。昔は「入ってしまえば生活保障」と言われた有名大企業だって、経済がしょっぱくなってしかも「70歳まで働け」といわれる現代にはもう通用しません。強いて言えば役所くらいでしょうか。ちなみに私は、地方自治体の外郭が一番安全だとにらんでいます。

現にワタミは社員を殺したし、三洋は無くなって40歳以上はどこかに再雇用されても給料は半分、山一証券も似たようなもの、シャープだって倒産こそしなかったものの中高年は分かりませんし、東芝も整理のゴングが鳴っています。ましてや中小企業は、「退職金なしでサービス残業50時間当たり前」とも言われています。今や「話が2割くらい違う」程度は当たり前で我慢のうちです。

「じゃあ起業しよう」って、成功するのは氷山の一角でほとんどは生活保護です。先日近所の自動車修理のお兄さんが夜逃げしました。修理工場跡の地は抵当として銀行管理になった後に今は資材置き場になっています。はっきり言いますと、世の中で最も楽に稼げるのは詐欺です。だから詐欺が後を絶ちません。困った世の中になったものです。

そういえば山崎豊子さんの「華麗なる一族」、最近キムタク主演で放映されましたが、あれって見方を変えると元祖社畜のブラック物語です。やがて来るブラック社会の悲哀を予言した山崎さんは、先見の明ありですね。

### 13、立派な人

今までに何回か、サラリーマンや社畜の悲哀を記事にしてきた。動物園のパンダみたいなもので食いはぐれはないが見世物になるだけ、自由は狭い檻の中だけでひたすら仕込まれた芸をするのみというわけだ。私自身30年以上も社畜をやっているので、天台宗の千日回行に例えれば大大大阿闍梨だし、懲役に例えれば人を一人殺したより長く簀子(すのこ)やお神輿作りをしているというわけだ。

ところが最近、これは私が社畜しかしていないための世間知らずではないかという気もしてきた。人生相談サイトでとある定年退職者が、「暇つぶしに退職金で喫茶店か瀬戸物屋でも開こうと思いますがどうでしょうか」と真面目に質問したところ非難轟々で、好意的な回答でも「退職金をドブに捨てるだけだからやめなさい」、強いものになると「個人企業主をバカにするのもいい加減にしろ」であった。

その個人企業主によると、「ただ座っていて店を開けば客の方からやってくる」などという思い込みが笑止千万であり、足を棒のようにして顧客開拓に励んでも最初の3年は赤字で、休日など事実上なく、声がかかれば真夜中まで飛んで行ってやっと何とかだそうだ。ましてや「瀬戸物のセの字も知らないで開業しようなど頭が狂っているとは思えない」とあった。

まあそうだろう。個人事業主の業界はさまざまだろうが、まあ多いのは個人商店か農業従事と言ったところか。いずれにしても先達のところにまず丁稚に入って使い走りから始めて師匠から技を盗み、かつ回転資金をちまちまためて十年後とかにやっと開業、それでも運が悪いと倒産という人生が待っている。そういう彼らから見れば社畜など甘ちゃんの限りだろう。

私はこういう個人事業主に最近何回か会う機会があって、会話をしつつその世界を垣間見たことがある。その1つは農家が近所のモールで定期的に関野菜等の即売会、2つ目は素人がフェスタの際に関フリーマーケット、そして3つ目は区の認定技能者たちの演技披露も兼ねた展示即売会であった。それらの技能者たちは区に認定されるくらいだから、腕前も結構なものだった。

まあ個人事業主は何らかの技能をネタに飯を食っているわけだからその分野の修練が欠かせないわけで、その意味では求道者の面もないわけではない。だが近所を見回して、商店街の八百屋やクリーニング屋のオヤジが悟りを得た高潔な人物かという、これはまた違いうだろう。まあどの業界でもそうだが、ピンからキリまで居る。そしてこれらの技能者を見ると、1人で4つの異なった側面を持っていることに気付いた。すなわち①技能者、②講師、③商人、④雇用者の4面である。

技能者としては、技が極めて高ければ人間国宝もあり得るという意味からは芸術に近い。求道者よろしく孤高だ。だが彼らの多くが体験教室を開くとかカルチャーセンターの講師になっている。これは打って変わって人間関係の濃厚な仕事だ。そして彼らはその知識や製品で金を稼がないと生活できないので、商人という面からは同じものをどれだけ吹っ掛けるかの阿漕（あこぎ）な存在になる。最後に雇用者、それなりに売れて多忙になると単純作業の部分はバイトを雇ってやらせるが、ここでは労務管理者である。

彼ら技能者は、ある人は芸大の院出でまたある人は中卒からのたたき上げと多様で、話の通じ方や志も大きく違う。だがそれ以上に違うのが、ある人はほとんど商人であり、またある人はほとんど技術屋であるというその多様さだ。ただどの人も商人の面がある以上は、残念だが徳が高い人に出会ったことがない。だが徳が高くないと言えど社畜だってそうだ。おもねりとさぼりの塊である。現代は構造的に偉人不出の不毛な時代なのか。

最近に蓮井秀義著「シベリアの月」という本を読んだ。戦後にシベリアに抑留（拉致）された人の体験記だ。この人は応召前や帰国後は教師をしていたそうだが、その教師時代を通じて「この人は偉い」と思える人に出会ったことがないと言っている。そして抑留中、これは過酷な条件で誰もが自分のことしか考えられず、ずるや告げ口や盗みや太鼓持ちは当たり前という生き地獄を経験した。

だがこの手の告げ口や足の引っ張り合いや手柄の横取りや上司の先棒担ぎは、平和な現代でも会社で日々横行していることであって、もちろん食うものもなかったシベリアと同じなどと言っては辛酸をなめたシベリアの人々に失礼ではあるが、程度の差こそあれ強制でいやいや仕事をする場面に共通の態様なのだ。私自身今までを振り返って、会社、学校、サークル、親戚近所等全部含めて立派な人に出会ったことなどなく、「もう一度会ってみたい」という人は一人もない。

ところが蓮井さんによると、シベリアでごく少数ではあるが「立派だ」と思える人が居た

というのである。厳しいノルマを黙々とこなす少ない食料や虱にも愚痴を言わず、ただひたすら己の行を遂行していた人が何人か居たというのだ。別に彼らも他の人の仕事を代わりにやってくあげたわけでもなければ、自分が飢えても隣人に食料を恵んだわけでもない。こういう行為はあるいはキリスト教なら褒めるかもしれないが、こんな極限的状況でそんなことをやるのは隙でありバカであり愚かである。そしてその立派な人たちは、そんな隙もなかったというのだ。

私自身は単なる社畜のつまらない人間ではあるが、そういう泰然自若の境地に少しでも近づきたい、少なくともそういう人たちに会ってみたいと強く望んでいる。ではそのシベリアの偉人たちは、帰国後どうなったのであろうか。蓮井さんの本にはそれ以上の記述はない。だがおそらく名もない一市民として、人生を全うしていったのであろう。そしてここで疑問が起こる。そういう立派な人が世の中に一定割合で居るのなら、会社や社畜の周りにだって良く見れば一人くらい居たのではないかと。でも断固として居なかった。

思うに人は、境遇に応じて本当の本人が出る。多くの人が特に老後に、心臓とか脳とかのリスクのある大手術の目に遭うだろう。そこで泣き出す人や夜逃げする人も多いのではあるが、別に目立たなかったような人が従容として手術に臨んだりする。結局偉い偉くないは人によるものの、それは置かれた環境によって顕現するものであって「常時偉い」と言うことはないのかもしれない。

つまり、私を通り過ぎた人々の何人かは私の知らないところで境遇に応じて潔さを出したりするのだろうが、会社、もっと広く言えば個人責任経済制下においてそれは出ようもないのではないか。それは社畜だろうが個人事業主だろうが大して変わらないで、個人責任体制下ではだれでもが卑しい商人にならざるを得ない。

大芸術家だってその人の作品は投資対象として値踏みされて、自分の創作の情熱とは裏腹に無情に取引されていく。作品が出来上がったとたんにハゲタカの餌食になるのだ。ペテン師や俗物の詐欺に使われることだってあるだろう。それが嫌なら人生を降りて一人山に籠るしかない。結局サラリーマンや個人事業主も、ある面では社畜でも別の面ではハゲタカになりハゲタカの恩恵で生きている。世の中はそういうものだと諦めるしかないのだ。

## 14、撤退将軍

先日ユーチューブで青山繁晴さんのマイナス金利に関する論評を見ていたら、「マイナス金利政策の目的は銀行潰しだ」と説明していた。論拠はこうである、「マイナス金利になると言うことは、市中銀行が日銀に金を預けると手数料を取られるということだ。今までは銀行は日銀に金を預けるだけで結構な利子を安定的にもらって食い伸びてきたが、もうこの手が使えない。そうかと言って市中に借り手は居ないのに市場から個人預金を集めても、単にだぶつくだけだ」。まあ一理ある。

私は青山さんが嫌いではないが尊敬してもいない。だが青山さんの動画はよく見る。その理由は単純で、短いからだ。学者センス者だったら1時間も延々と語るテーマを、5分でバサリとやる。私のように気が短くて飽きやすい人や別途ライフワークがあって忙しい人には、極めて都合がよくかつ親切だ。だいたい今の世の中は専門化と情報過多が行き過ぎていて、「厳密でなければ全部嘘だ」とか「専門的科学的でなければ妄言だ」みたいな雰囲気は横行しすぎている。

その点青山さんのように、反論覚悟で第一要因のみをバサッと行って終わりという情報発信の仕方に私は激しく賛同する。こちらの手法が世の中の標準になって欲しい。もし興味を持ったならその時にその人だけ、もっと詳しく知ればよいのだ。もちろん「一言バサ」にはあたかもネット右翼の「街宣車は在日が日本の印象を貶めるためにやっている」的な一面的な危うさもあるのだが、それにもかかわらず「一言主義」や「一言解説者」は正しい位置に認定されるべきだと思う。不肖私も同じ理由で、「1記事は誤解を恐れず2500字以内」を旨としている。

さて、冒頭の青山さんの主張に戻ると、マイナス金利の目的はあくまでも人工的なインフレ製造であって、「銀行が従来のビジネスではつぶれる」というのは逆転の発想としては面白いが、これはあくまでも副作用の一つである。もしかしたら本当に銀行の統廃合や、もっと大きく金融業界全体の縮小はあるかもしれないし、もし金融業界が縮小すればそれはすなわち日本の産業界の縮小に直結してアベノミクスには逆効果になるのだが、それとても「なっちゃったのだから仕方のない」と言うことなのだ。

そもそもアベノミクスの3本の矢とは、財政出動、金融緩和、そして民活の促進であった。そしてこれら3本が全部回った時だけ日本の復活はありうる、つまり「日本に復活があるとすればこの3本が全部うまく回る時しかない」、これが安倍さんの本当の信念である。安倍さんも伊達に雌伏していたわけではないし、この信念は正しいだろう。

ただこの3本が全部回るか否かはかけの要素もあるし、日本だけがプレイヤーなわけではないから他国も負けずに頑張るだろうし、経済は世界の動向に大いに左右され

る大海原に浮かぶ帆船のようなものだ。そこで勝ちも負けもあるだろうがトータルで幾分でも勝ってほしい、それが安倍さんの本心であり願いであろう。ということはもし武運つたないときは負けることもあると、安倍さんは実は心の中で認識しているということだ。そんなことは口が裂けても言わないが、実は可能性として考えているということだ。

私は社畜時代、うだつが上がらない社員だった。そもそも社畜になったのも、ちょっとでも偉くなろうとか会社に期待があったからだとかそう言う事は全くなくて、自分のライフワークである瞑想を絵空事にしないためには、舞台が大学のような幼稚なところよりも会社のほうが多様性と現実性があるって肥やしになると踏んだからだ。だから会社でも、上司におもねるとか人事に右往左往するとか群れるとかいうことは全くなくて、ひたすら現象観察に徹していた。

そんな私が一度だけ下士官をやらされたことがある。バブルがはじけて数年後に、バブル時代にぶち上げた夢みtainなプロジェクトを廃止する部隊の小隊長みtainな役だ。止めるのが仕事だからその程度の社員しか集められていないし、全く士気が上がらなかった。そもそも止め方として、「現場は続けたいと言っているが」という舞台装置が必要で、そのためのいわば格好付の討ち死に要員である。

その時観察したのは、元は技術系出身の、技術の守護神と目されるような技術系経営陣の人々が率先して、「夢プロ潰し」の先陣を買って出ていたことだ。まあそれほどに節操がないから、良く言えば狭い技術に溺れない広い経営マインドがあったから役員になれたのだろうが、その変わり身の早さには感心したね。そして上の態度がこうなのだから、我々殿（しんがり）部隊にやる気が出る訳なんかない。

その時に小隊長の私が感得したことは、撤退というものは「攻めるぞ・攻めるぞ」というそぶりを見せつつ、気が付いていたら撤退していたというやり方をもって上策とするということだ。キスカ島は撤退しアッツ島は玉砕したが、ミッドウェー以降にキスカ島方式を全面採用した上で適当なタイミングで講和に持ち込めば、あれほどの戦死者を出すことはなかっただろう。

こうした観点で安倍さんの施策を見ると、3本の矢やアベノミクスであたかも攻める風を見せながら、他方で年金の減額に言及したり銀行にも一定の我慢を強いたり、あるいは電機産業等の諸産業が整理縮小されてもあえて座視したりとか、保活騒動が起きてもマアママで引き延ばしたりとか、これは要するに「みんなで平等に一定の痛みを分け合って均衡縮小に、つまり相似形に撤退しよう」と言う態度が、衣の下に鎧が見

え隠れしていると言う事だ。

私はこれをずるいと言っているのではない。伊達政宗も若気の至りで進軍しようとしたときに、懐刀の片倉小十郎が、「負けると知ってなおも突き進むのは匹夫の勇に他ならず」と戒めた。そして攻めると見せかけて気づいていたら撤退していた、これはむしろ真の知将でないとできない高度な技である。その意味での安倍さんの役者ぶりに期待する。

## 15、芸術の裏表

私はこれまでにサラリーマンや社畜をこれまでに随分とくさしてきたが、じゃあクリエイティブな芸術系はバラ色かと言うとそれはそうでもない。就職や自立が困難でしばしばバイトで生き延びないといけないという需要の少なさに加えて、心を込めて作った芸術品が出来たとたんに資本主義に組み込まれて値踏みされるという汚い面にあえて目をつむるという難しい問題がある。

先日ある画廊に、中堅程度に名の知れた画家の個展を見に行った。私のような初心者でいかにも金もなさそうな客には、昨日今日入社したばかりのような新入社員が相手をしていたが、そのうちにおよそ芸術とは縁遠いような成金趣味の黒スーツを決め込みポケットに札束をねじ込んだような兄ちゃんがやってきて偉そうに顔パスで入っていく。どうも芸術専門商社のバイヤーのようだ。そして画廊側も良くしたもので、ベテランのおばさんマネージャーみたいな人が手もみをしながら出迎えて、2人で商売談義を始めた。

バイヤーにも一応の見る目はあるがその視点は「どれだけ美しいか」ではなくて「どれだけ売れそうか」のみであり、おばさんマネージャーの方もそれはわきまえていて「この大きさにこの仕上がりですから正札の3割引でどうですか、それより今日は5個くらい持って行ってくださいよ」などとやっている。もちろんそれは平日の昼間で客も少なく画家本人は不在の時だったが、つまりいくら目が金の人たちでもTPOは一応わきまえているようだが、それにしてもそのやり取りの態様は、売り買いの対象が絵だろうが大根だろうが金塊だろうがまるで変わらないという風なのだ。

画家の方だって居合わせてはいないものの、同じ業界人だからこういうやり取りは薄々と知っていることだろう。売れた絵については画家から所有権が離れて売り買いや投資の対象となり、画家はそれ以降何も口出しできず、画廊の方は手数料をピンハネして半額ほどを画家に渡し、画家はその金で日々の生活をするのであろうが、必

要悪とは言え芸術家は社畜と違って作品に心を込めるその分だけ自分の作品が値踏みされ投機されるのは心苦しいことだろう。

ところがこの分野で生きている知り合いに聞いたところ、この画家の場合は人の手を介するだけまだましな方だという。よほど売れる画家でないと画商すらついてくれないので、自分の作品を自分で売るしかない。「昨日はナイーブな芸術家で今日は心臓に毛の生えた商売人」という、切り替えが大変な2つの人生をこなさないといけないのだ。中にはぼろくそにけなした上に買わずに立ち去る客もいっぱい居る。芸術の価値と値段なんて水物だ。規格化された工業製品のような定価などない。

こんな裏世界を見てからしばらくして、私は第二の裏世界を見る羽目になった。それはとある骨董市に行った際のことだ。骨董という世界、そもそも骨董に限らず中古品市場は、家の仲介だろうが中古車であろうが多分にそうであるが、値段など水物で相場などなく口先3寸でいくらにでも売れるだまし合いの世界である。朝と晩で値段が違うあるいは相手を見ながら値段を変える、それも倍半分ほど違うと言う事は日常茶飯事だ。ましてや骨とう品は新品の時からしてすでに水物なのだ。

市(いち)だからフリマよろしくいろんな骨董屋が数平米程度の店を広げていたが、彼らに共通して言えることは①個々の骨董品の素性については言わないし聞いてはいけない雰囲気だ、②私のような素人が勉強したくても知恵はつけないぞと言った雰囲気だ、という点だ。要はいかに駄物を吹っかけて売るかの勝負なのだ。いくつかの店は家に帰ってネットで調べてもまったくヒットせず素性すら怪しいし、値段的にもネットオークションと比較してみたら数倍も高い。

骨董業界と言うと、最近何かと話題のTV番組の「なんでも鑑定団」の中島誠之助さんがいる。この人は見るからに求道者で日々の修行も怠らず知識や経験も豊富で、この人だけ見ていると骨董業界が公明正大な業界であるかに錯覚してしまう。そして骨董道も道としてやればそうなのであろうが、この人がむしろ特別なのであって町の骨董屋はかなりいかがわしい。それに今の中島さんは骨董売り付けでなくTV出演料で生活しているので、厳密にはもはや骨董屋ではない。

これが古今東西の芸術品のなれの果てである。芸術品と言わなくても文学や文芸だって有名人の本がブックオフで、数十円程度で売られていたりする。しかも芸術業界は「のため」でもやっていたが、同僚が不調になると競争相手が減るので秘かに喜んだりするらしい。こんな世界はよっぽど心臓に毛が生えていないと務まらない。社畜の方が「仕事に対して鼻から何の思い入れもないだけマシだ」と言えるほどだ。

こうして今まであまり目を注がなかった芸術・技能の業界に目をやると、社畜よりも使い捨ての芸術家や認定技能者よりも更にもっと使い捨ての分野があることに最近気づいた。私の地元の横浜は開国とともに港が開いたところなので、明治初期にはかなりの工芸品が海外に輸出された。中でも捺染(なっせん)と呼ばれる絹織物の特にスカーフとか手ぬぐいは、美術や芸術としてもかなり高度である。そこで陶磁器や山水画のように図録集を探したのだが、どこを探してもない。中央図書館の司書に聞いたところ、これらは芸術品でなく商品の扱いなので、図録は存在しないとのことだった。

つまり売り買いされ投機の対象にされるといっても、絵画や彫刻や陶磁器は展覧会で回顧されるだけまだましであって、これが絹織物や大漁旗になるともはやチラシと同然の商品であって、売ったらおしまい擦り切れたら捨てられるだけの消耗品なのだ。工場専属のデザイナーには腕の立つ人も多かっただろうに、もはや回顧すらされない。「人の平均的な能力が使い捨てされても惜しくないほどに高い」と言えばそうなのだろうが、世の中いろいろ考えさせられる。

#### 16、ローカルチェーンの生きる道

ここ15年程日本経済の右肩上がりの終焉に伴って、産業界を含む日本のあらゆるシステムが適正化、もっとはっきり言えば合併淘汰の道を歩んできた。最初の大物は銀行業界で、かつては「都銀12行」などと言われていたのが現在は「み」で始まる3メガバンクに集約された。やはり小泉政権の時になされたのが、地方自治体の大合併である。特に秋田県など跡形もなく合併して、延々と野原の続く山野も「市」と呼ばれるほどになった。百貨店や家電量販店、スーパーやコンビニも次々に合併統合している。そして今現在進行形なのが電機業界で、これも近いうちに「3メガ重電」とかに落ち着くことだろう。

このように全てが寡占化・大局化・全日本化の道を進む中であって、なぜかどの地方にもミドルサイズのローカルチェーンがしぶとく残っていて、いま述べた寡占大局化の波に飲まれていない。私の住む神奈川県でもそのような例として家電ではノジマがそしてコンビニではスリーエフが、全国チェーンに肩を並べて残っている。他の県については詳しくないが、例えば大阪には玉出チェーンが、北海道にはセイコーマートがある。これらチェーンが飲まれずまた淘汰されずに残れている理由とは、素朴に何であろうか。

そもそも合併の一番大きなモチベーションは企業体力である。分かりやすいのが製薬

業界だ。創薬の場合、新規合成物質数千個に1個程度しか薬効がない。大手製薬会社の研究員の3人に2人は、新薬を開発することなく定年退職を迎えるという。その代わり1つ見つかるとその特許が何兆円もの収益をもたらす。勢い体力勝負にならざるを得ない。最近もそもそも大手だった山之内製薬と藤沢薬品工業が合併してアステラス製薬になり、第一製薬と三共製薬が合併して第一三共製薬になった。そしてこの手の体力問題は製薬会社に限らず、開発を軸とする会社には必ず存在する。

もう一つの合併のモチベーションが、社内システムの合理化と相互補完だ。いずれも間接部門やシステム開発を効率化・一本化することによって、組織のスリム化が狙える。また体力があるほど、関係業界（仕入れ先等）に対して強い圧力を掛けられる。こちらの例がデパートだったりコンビニだったりする。こうして世の中のあらゆる組織が大型寡占志向にあり理屈でもそうなる中で、どうして「中途半端な」ローカルチェーンが生き延びられているのだろう。

例えばノジマの場合店舗数は200店弱の社員は2千人弱で、いずれも業界最王手のヤマダ電機の10分の1である。1店舗当たりの床面積も数分の1だ。にもかかわらずノジマを利用した私の経験からすると、ヤマダ電機やビックカメラに比べて特別に不便を感じない。まず、値段が高いということはない。機種も主なところは揃っている。特にマニアでない限り選択の余地がさほど狭いとも思えない。そして何より近くにあって気軽に行きやすい。ただ売り物が家電である以上、地元の特産品で特色を出すということとはできない。店舗展開にも特色がある。横浜、新横浜、川崎と言った既に大手が進出している大きなターミナル周りにはあえて出店せずに、私鉄の急行が止まります程度の中規模駅の前を選んで出店している。これらの総合的存在感が仕入れ先のメーカーに対して、一定の力を有しているのであろう。

次にコンビニ業界に属するスリーエフだ。店舗数が600で社員数が400名と、最王手のセブンイレブンの10分の1以下である。しかもセブンやローソンもあらゆる街角に店を出しているから、スリーエフも多少地元には強いとはいえ、これらと肩を並べてのかなり平等な競争になっている。この業界は最近PB（プライベートブランド）の重要性がますます増しており、この開発力が勝敗を決している。これは基本的に体力勝負と思われるところ、なぜかスリーエフにもPBもおでんもコーヒーもあって、ないのはドーナツくらいだ。地元横浜の名産品で差別化を図っていることは多少ある。

結局これらのローカルチェーンから見える特徴とは、①ニッチに徹し、②地域占有率という存在感で、③スケール上のデメリットを補っているという形のようなのだ。これらローカルチェーンの経営者は、いずれも創業者一族による同族経営である。今のところココ

一番屋と同じくそもそも経営者に才能とやる気があるうえに、有能な社員を引き抜いてきて基盤をしっかりと手堅く固めて生き残っている。ただ今後の戦略の大きな分岐点は、今後もニッチにとどまるのかそれとも全国展開を目指すのかにあるように思う。前者のほうはいずれ飽和するし、後者のほうは基盤こそ安定するが大に食われる危険も増す。

たしかに冒頭で上げた製薬業界も、他方で中堅レベルの会社がないわけではない。大田胃酸とかサロンパスとか特定の著名商品で変に色気を出さずに堅実商売をしている会社とか、あるいはジェネリック薬品（特許切れの薬品）専業で開発をせずに生き延びている製薬会社とかもある。これらの会社を見てもわかることは、下手に拡張せずに身の丈に合った経営をしてそれが存在感になって取引先に力を行行使えることである。しかもこの身の丈を自分で知ることは、大手がひたすら合併に走るのよりもむしろより繊細な経営判断を要する。

①株式は公開しない、②一族経営の要諦は握っておく、③それでもなお優秀な社員を集める、④店舗展開は風見鶏的に機敏に行う等である。意地やつまらない見えを張らないのだ。もう一つの彼らの使命は、いかにして中高年社員を処遇するかであろう。家電老舗の「カメラのさくらや」が倒産したのは、業界のさきがけだったことが裏目に出て、社員が他のチェーンよりも高齢化したのに対応できなかったからだという。そういえばノジマでオジサン社員を見たことがない。どうなっているのだろう。

具体的には、①大きくなりすぎない、②地域に根付く、③牛若丸のような身軽な経営、これら3要素を生かすことが、ある意味時代の流れに逆らってローカルチェーンが生き延びているコツだと思われる。大法則の陰に小法則あり。

## 17、宇宙はホロノームか

我々の宇宙は、138億年前に起こった量子論的揺らぎに起因するビッグバン（大きなドカン）によって生成した。その後宇宙は断熱膨張して冷却され、時空と物質が生成された。ただしその時空は「のっぺり」ではなくて、重力子のマクロ効果である一般相対性理論の特に慣性質量と重力質量の同等性により、大きな質量の近傍では空間が大きく歪んでいる。特に質量が閾値を超えるとブラックホールと呼ばれる微分の定義できない特異点になるが、その特異点の周囲の空間はほとんど非連続に捻じれている。

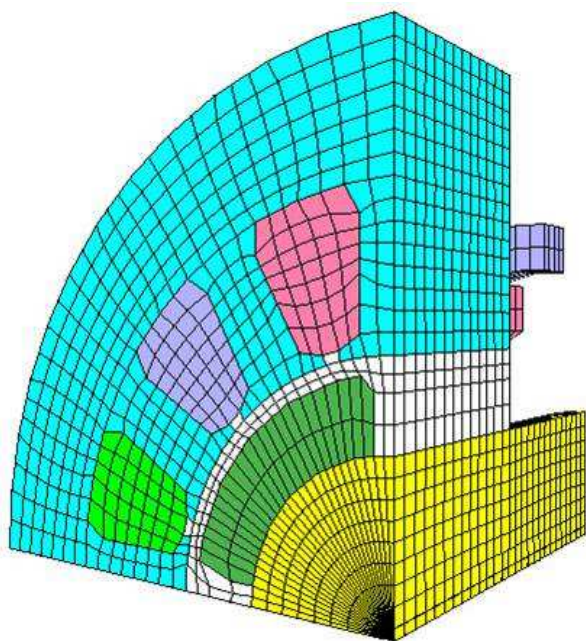
つまり我々の宇宙はおそらく一体物ではあろうが、それは球体のように滑らかでも一

様でもなんでもなくて、むしろあちこちで歪んだりねじけたりしているのだ。このような幾何的対象を現代数学では「多様体」の見方で理解する。例えば球面でもこれを、まず複数の平面とその上の直交座標があって、これらの複数の平面で包み込み張り合わせた（平面座標を正則写像した）実体であると見るのである。

この見方だと対象空間の大元の座標は、その歪んだ空間自体に直接に刻まれているのではなくて写像元の平面座標が第一義的になるから、特に何の問題も起こさずに通常の幾何のように近傍系が入って位相を形成し、その平面座標を用いて微積分等の解析操作が自由にできることになる。つまりこの多様体の観点で見た我々の宇宙は、ホロノームである。ホロノームとは「座標系の接線をつないでいくとそれがそのまま座標軸になる」という意味であるが、分かりやすく言えば解析的に素直な形ということだ。

ところが実際に宇宙論で現象を解析するときは、私もこの分野に詳しいわけではないが、別途平面座標系に写像してホロノームであることを確認した上で解析しているのではなくて、天文学で観測された実測の距離や角度、つまり距離が何光年だとか射手座の方向にあるとか言った実測をそのままに使って解析している。つまり先の例でいえば曲がった空間に座標系を直接に刻んで解析している。ということはこの見方では宇宙はホロノームでない。

例えば下の絵は複雑形状の応力解析のためにメッシュに切った図であるが、一応構造格子であるためにメッシュの線をそのまま座標軸と見ることもできよう。



ところがこのような間隔や方向が不規則な「座標軸」は現代数学では問題が出てきて座標軸とはみなされない。具体的にはX方向に1進み続いてY方向に1進んだ場合と、逆にまずY方向に1進み続いてX方向に1進んだ場合では、たどり着く点が異なってくるのだ。こういう性格をホロノームでないと言う。

そしてホロノームでないと微分が経路による、あるいは微分がその順序によることになってしまうし、かつ近傍系も現状では定義できないのでハウスドルフにならない。微分が順序によるなどとは誰も聞いたことがないだろう。そしてハウスドルフでなければあらゆる物理が、広がりなくその点のみでしか成り立たないことになる。こうなると物理は、マクロはおろかミクロでも成り立たなくなってしまう。

だから宇宙論においてそのままの形に空間に直接に座標系を切ろうとすると、微分が順序によって異なってきてずれることになる。そしてこのずれは、空間の特異点であり宇宙論の対象としても注目されているブラックホールやダークマターの近くであればあるほど、顕著になって無視できなくなってくる。

さて、微分が順序によるあるいは微分演算子がアーベルでない、これ自体は確かに面倒なことではある。しかし数理科学がこういった一見面倒なことに逆に注目し利用することにより発展してきた歴史に鑑みるならば、ホロノームでないことは単に面倒だと舌打ちするだけの代物ではないかもしれない。

例えばポテンシャルは基準点がどこかに依存する不定性がありこの不定性は厄介なものと思われてきたが、この自由度に注目することにより逆にゲージの自由度が導出されこれがゲージ理論に発展した。あるいはリー群は非可換だが、その非可換の度合いつまり交換子積を取るとそれが新しいリー群を生み出してヤコビ恒等式に至った。

だからこの際は宇宙論が素朴には非ホロノームであることをきっかけとして、座標系や数学の非ホロノームへの拡張を試みてみたらどうであろうか。宇宙論はもちろんのこと数理科学にとっても新たな視点や展開が得られる、逆にチャンスかもしれない。

## 18、画像検索と認識

画像圧縮の規格であるJPEG等の原理は、基本的に「離散コサイン変換」だ。これはフーリエ変換と似た技術である。フーリエ変換に例えればBMP(ピクセルごとの色データ)を波長データに変換した上で、短波長(細かい変動)を切り捨てることにより情報

圧縮を図っている。ここでどのレベル以上短波長成分を切り捨てるかで、画像の細かさと情報量をトレードオフしている。

ただ、波長が短ければ短いほど情報量の割に絵の見てくれはあまり変わらなくなるので、「どのレベルで切っても人の目をごまかせるか」と世の中の記憶メディアの容量の相場で、その切り捨て位置を決める。ことさらに切り捨てると、あたかも画像を単純拡大した時の粗さや動画の各画面のぼやけ加減のように、画像が荒くなる。もちろん動画の場合1枚1枚を静止画ほどに密にすると、重くなりすぎてしまう。

以上の原理からわかるように現状の画像圧縮の技術は直接には画像の特徴をより良く残すように圧縮しているのではなくて、用いている応用数学上の都合による圧縮である。ただこれが結果的に人の目にも十分に耐えられる圧縮技術であることは実用を通じて、例えば犯罪の証拠写真にも用いられるという実績によって認められている。

ところで最近画像検索、と言っても言葉で画像を検索するのではなくて画像をもとに似た画像を検索する技術が、かなり実用に至っている。この時に用いている元の画像圧縮技術は今見たように基本がフーリエ変換なのだから、画像による類似画像検索とはフーリエ変換の主要部分、つまり長波長部分が同じか違うかで判断していることになる。そして画像単独では十分に人の目をごまかせたものの、こと画像の特徴の類似非類似ということになると実際に使ってみるとわかるが必ずしも特徴をよく拾えていない。主観と波長は原理が異なるからだ。

現にこの手の技術では「精度を上げるため」と称して、「補助的に」キーワードの入力が奨励されている。だがこれは実は、画像検索用の人工知能の精度向上にユーザーにタダで教師役をやらせているだけなのだ。今のレベルでは、というか元の技術が応用数学上の都合なので、応用数学の融通のなさをカバーするには人の介助が必要だというわけだ。かつて私は自分の顔写真を使って検索してみたら、市川猿之助の画像がヒットした。両者に「人の顔である」という以上の類似性はないのだが、検索ソフトでも今までの学習から人の顔であるという推論までは一応できて、そして今までのユーザーの入力キーワードから最多の入力のあった市川猿之助を答えとして出したということであろう。

別のケースでは、修験道体験に参加した時のお焚き上げの画像を元に検索をしてみたところ、このような複雑な画像はそのフーリエ長波長と言っても類似がなさすぎるのであろう、赤を基調としたピカソの絵みたいな訳のわからない絵ばかりが出てきた。そ

ここでキーワードとして「お焚き上げ」と入れてみると今度はお焚き上げの画像をたくさん出してくれたが、どうも画像でなくてキーワードで出てきたように思う。

これらのことは何を意味しているかというと、人による画像の特徴認識はフーリエ変換や現行の応用数学とは全く別の原理で作動しているということだ。この典型が似顔絵である。特にデフォルメの似顔絵は特徴のみを誇張し強調して描くので「本物よりも本物らしい」と言われるが、画像検索機能が似顔絵を元に本物を当てた試しがない。顔の特徴というのは座標軸に沿った縦横の波の打ち具合で決まるものではないからだ。

人が似顔絵で元の本人を当てるのは特徴の発見によるが、その特徴は決して形状の一致ではなく、むしろ平均や標準からのずれ具合である。ということは似顔絵の前提として人は長い間の経験による学習を通して、人の顔やそのパーツに関する相場観つまり平均とか分散とかを脳空間に心象として確立していて、その物差しを元にしてずれ具合を特徴として認識し、それらの特徴を総合して元の人物を当てている。このルールを人工知能に陽にルールとして埋め込むのは至難の業である。原理が違いすぎるのだ。

例えば人の目は一般に、「大きい方が美しい」とされている。もちろん美は時代や民族によるが、漫画の女の子はいちいち目が大きい。でもだからと言って大きければ何でも良いわけではなくて、いびつだったり、吊り上がっていたりロンパリだったりすると変に感じる。さらに目が大きいのは喜ばれるが、鼻や口が大きいのは嫌われる。単純な算術のおよそ及ばないところである。しかももし漫画の絵と同じくらい目の大きな本物の人がいたら、これはもう妖怪になってしまう。

ところで大元に戻って、素朴になぜ目は大きい方が美しいのだろう。顔全体の特徴となってメリハリができるせいだろうか。だとしたら鼻や口はなぜ大きいと嫌われるのか。鼻や口の大きい人に下品でデリカシーがなく頭の悪い人が多いという経験によるのだろうか。先日も提起したが、志野の銘「振袖」はなぜ美しいのか。①形、②色、③模様、④テクスチャー、⑤微妙な非対称感、そして⑥一見古木が倒壊した後に残った木の株のようなわびさび感と言ったところだろうか。いずれにしろ美、もっと広く上手いとか香しいとか気持ち良いと言った快感、これらの大元は人の防衛本能であろうが現実には本能のレベルを超えて脳の高度な活動としての高揚感になっていて、およそフーリエ変換どころではない。

美とは何だろう。話を数学の美に寄せても「なぜ黄金比は美しいのか」、人はこの問いにすらまともに答えられない。ましてや美術の美など数学の如何ともしがたい世界な

のだ。画像検索が仮に進歩したとしても近似の一つとして使いつくすのが関の山で、これをもとに美の本質を数値化しようなどという期待はおよそ無意味であろう。

### 19、主が勝利した？

四十七士の物語には、武士道、忠誠、隠忍自重、名を惜しむ、命を厭わない、潔さ、隙のなさ、花と散る美学、もののあわれ等々、日本人の美学の中核をなすところが余すことなく描かれており、まさに大和魂の教科書である。言い換えれば武士道は四十七士によって完成されたとみることもできるが、他方で記紀神話にはヤマトタケルの壮大な物語がある。歴史学者たちはこれらに物的証拠がないことを理由に「信ぴょう性は薄い」とするが、逆にあれだけ壮大な物語が何のモデルもなく自由創作できるとは到底思えない。だから仮に後世の脚色はあったにしろ、核となるところには相応の人物がいたと想定せざるを得ない。

ヤマトタケルは第12代景行天皇の息子で、父君天皇に命ぜられてまず九州の熊襲（くまそ）征伐を、次いで休む間もなく東国平定を命ぜられた。困難のうちにこれらをほぼやり終え、帰路もゴール間近で琵琶湖東岸の霊山の伊吹山で土地の神との争いに敗れて、討ち死にした。そしてその魂は白鳥となって大和に向けて飛来し、途中の現在の三重県の能褒野（のぼの）辺りにおいて力尽きたとされている。その際に故郷を恋うる有名な歌の、「倭（ヤマト）は国のマホロバ タタナづく青垣 山隠れる 倭シ麗シ」を残している（MSワードのエラー回避のために最小限の修正を施した）。この歌の心は、私も明日香の宮に行ったときに実感したものである。

ちなみに第14代天皇にはタケルの息子の仲哀天皇が即位しているが、これには人々のタケルへの愛慕が働いたことであろう。そして仲哀天皇の皇后が三韓征伐で有名な神功皇后であり、彼らの息子が第15代の応神天皇、すなわち若宮であり源氏が崇拝する武勇の神の八幡様である。なお一応の弁解をしておく、父の景行天皇は一見無慈悲な父親に見えるが、彼自身もタケルに先立つ熊襲征伐を行っている。その様子は今も、山鹿灯籠踊りに伝えられている。

ところでヤマトタケルは、あるいは皇位にも就けた血筋でありながら地を這うような危険な職務を委嘱され、見事に遂行したものの結局凱旋はなく、白鳥の美しい魂も故郷の倭に帰れたのか不明である。無情と言えは無情だ。だがそうかと言って人々は彼を憐れむものの、名誉回復を目指してデモ行進をしようとか、彼が死後復活をして王座に座ったことにして損得のバランスを取り合理化を図ろうとか、そういう行為は一切見えない。ただひたすらに哀悼するのみである。

これは合理主義を大元とする欧米人には考えられないことである。隙なく自分の行を果たした者が称賛を浴びるところか命も惜しまずに野たれ死んで、しかも人々は彼になにも呉れずにただ悲しむのみだ。だがここにこそ日本の美の原点があることに注目してほしい。安っぽい合理化など下らない隙の限りであり、麗しいタケルの志を地に引きずり落とそうとする卑しい行為以外の何物でもないのだ。無情ゆえに、悲劇ゆえに、尊く美しいのである。この日本の美学はタケルによって始まり四十七士によって完成し、日清日露の2大戦の勝利によって面目躍如したのである。

タケルや四十七士が我々日本人に教えること、それは第一に勝ち負けなどどうでも良いということだ。それは負けるより勝つ方が良いだろうが、それにしても隙のない行というものは勝ち負けを超越しており、勝ち負けを意識した時に既に負けている。同様に生死なども問題ではなく、いかに真剣に生きたかが大切である。生死を意識した時点ですでに死んでいるのだ。さらに損得を意識した時点ですでに大損している。欧米人にはこの広い心を教えてやりたい。この武士道を世界に発信したい。この無心の心こそが「おもてなし」に通じているのだ。

欧米人と言えばキリスト教だが、彼らが好きなのは勝利する物語だ。クリスマスやイースターになると、「主は勝利された」と大声で叫ぶのが何よりも快感であるらしい。いや欧米人ならまだ良い。四季自然のわびさびの中に生まれた日本人や東洋人の中にも、何をトチ狂ったか「主は勝利した！」などと叫ぶ人たちがいるが、正気なのか。地球の裏側の他人の神を祭ってしかもそれが勝利したなどと言うたわごとを、演劇だと思って空々しく裸の王様をほめているならまだ良いが、本気でそう叫んでいるとしたら開いた口が塞がらない。

ヤマトタケルにしても四十七士にしても最後は名誉ある死であり、死を負けと言いたいなら負けであるが、しかしそれは花のある死である。白鳥であつたり名が残ったり、何よりも日本人の心に美しく咲く、それは花なのだ。花のない勝利などゴミ以下だ。

私は長い間、タケルの魂は倭(ヤマト)に帰れたのか否か、それが気がかりであつた。死に際して望むこと、それは叶えてやりたいし、もし白鳥が倭にたどり着けたとしてもそれは花を汚すことにはならないだろう。この点を知りたくて古代学や神話学の諸先生の講義を聴講したこともあるが、学者先生たちが書いてない根拠のないことを言えるはずがない。結局不満足ではあつたが、今はそれで良いと思っている。ミステリーだからこそ心の襞の奥深い所に染みるからだ。白鳥伝説のあの終わり方のおかげで今の私の魂は生きていられる、今はそう思っている。

## 20、整数特許

最近スタンフォード大学の研究者が、「素数の分布に偏りがあることを見出した」と発表した。素数とは、1か自分自身以外の数で割り切れない数で、小さいうちは2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19, 23・・・と結構密だが、だんだん存在が薄くなっていく。

今回の発表はまず素数を小さい方から10億個集めて、その1の位の出現回数に目を付けたものだ。1の位の数字が1, 3, 7, 9の4つ以外は2か5で自動的に割り切れてしまうので、これらは先ず除外する。そして検討の意味のある4つの数字について「1の位が1で終わる素数の次に来る素数の1の位の数字」を調べたところ、その出現確率は均等でなくて「1の次は1以外の数字である確率が有意に高かった」というのである。「なぜか連続を忌避する」というわけだ。

ところで整数論は最近まで天才のガウスによって「数学の女王」と賛美されながらも、最後まで応用先のない言わば数学者の道楽であった。ところが近年の計算機の発展によるデジタル文化の肥大化によって、この「最後の園」も産業応用の道が開けて泥臭く利潤を生む有価物になってしまったのだ。その具体的な応用先とは暗号理論である。

暗号と言うとスパイとか国家同士の暗躍とかを連想するが、実は我々の日々に密接に関連している。誰でも持っているクレジットカードの番号を送信する際にも、万一詐取されても意味が分からないように暗号化して使っている。また最近は特に顧客情報や社内秘密を保持するために、会社の情報は常に暗号化しておいて万一流出しても意味が分からないようにしてある。

ここでの暗号化のコツは特にネット社会を考えると、「暗号化は誰でもできるが復号化は特定の部門にしかできない」という非対称が望ましい。つまり暗号カギは公開で復号カギは非公開（秘密）かつ容易に推測されないという、ある意味逆向きの要求を満たすことが必要だ。そしてこれに答えられるのが割り算で割れない、つまり因数分解によって還元されない素数と言うわけだ。

現在では大きな素数は売り買いの対象となっており、企業秘密として管理されているかあるいは特許を取得して使用者制限をかけている。特許と言うことは技術を公開する代わりに一定期間（20年）の間独占排他的に使用できるということだ。特許法は一種の産業促進法であり、特許を取得することは経済活動の対象であるとお墨付き

をもらったことに当たる。一般に特許はブツにかかわらないと取れないので最近まで数学は特許とは無縁だったのだが、計算機の進展によりアルゴリズムも計算機との協働性が認められれば特許の対象になることになった。

こうしてにわかに注目を浴びることになった素数だが、素数の研究の仕方は色々ある。正攻法は最大公約数や最小公倍数のように、整数を整数として正面から扱う方法だ。ただこの面から見たときに素数とはどんな数の倍数にもならない、つまり箸にも棒にもかからない「残り物」の総称である。そしてその残り物具合にもいろいろな理由があるものの混ぜ合わせなので、一般則は極めて見出しにくい。

よく使われるのが素数の性質をゼータ関数と言う無限級数和に、つまり解析学に置き換えて証明する方法で、置き換えている時点で正攻法とは言えないものの多産である。一時話題になったフェルマーの最終定理の証明のキーとなった志村谷山の定理も、このゼータ関数を利用している。

こういった観点からは今回の、「素数の分布がランダムやカオスでなくて何らかの作為が潜んでいる」との結果は、新しい素数を直接に導出するものでなくて、既に見いだされた素数の間の統計的な関係を見たものであって、いわば素数のビッグデータ解析である。そしてビッグデータならば切り口はまだほかにもあって、もしかしたらもっとシャープな分布の偏り、あるいはマルコフチェーン的偏りが見つかる可能性もある。

ただ今回の発見について発見者たちは、「産業応用の可能性はほとんどない」と言っている。本当にないのだろうか。例えばある1で終わる素数が見つかったとしてその1の位の1を3や7に置き換えれば、例えば10の位をいじるよりも素数を見出せる可能性が多少高いと言えるのではないだろうか。

そういうことはあるだろうが、現在の産業応用としての素数は「小さい順にしらみつぶしに求めていく」と言う方法では探索されていない。そもそも産業応用からはバカでかいのが1個見つければよいのであって、順番などどうでもよいのだ。具体的な探索法はノーハウになっているようだが、例えば素数を適当に数十個集めてそれらを全部掛け合わせたものに1を足せば、少なくとも元になった素数とは素であるから順序によるよりもずっと効率的に大きな素数を見出せるだろう。

素数は無限個あることが知られていてこの証明は比較的容易なのだが、今産業を念頭に見出されている素数は1000万桁にも及ぶという。「素数が1000万近辺」と言うだけでもおよそ人力では無理だろうが、ここでは素数の桁が7桁でなく1000万桁な

のだ。数が大きくなるほど素数の分布は薄くなりかつ素数であることの実証に手間がかかることを思えば、これは膨大な結果である。

最後に素数分布が完全なカオスでない理由を見てみよう。それは先の例でいきなり、「10進法では1の位が0, 2, 4, 5, 6, 8はありえない」としたが、まさにここに象徴的に表れている。整数を仮に10進法でなく9進法で書いても素数であるという性質は変わらないのだが、9進法で素数でない1の位は1, 2, 4, 5, 7, 8である。そして10進法の2、12、22はそれぞれ9進法では2、13、24になって1の位はずれていく。だがさらに10進法の90は9進法では110になり91は111になると、飛んだところで再び規則性が復活する。つまり変な規則性が隠れている。これがつまり、素数分布が完全にカオスやランダムでない理由だ。

## 21、友人と人間失格

今までに私は、禅の公案について何回かメモをしてきた。公案は最高の脳トレなので、瞑想が趣味の私にはおいしいお餌なのだ。具体的には「犬に仏性があるか」については「質問自体が愚かだ」、「ビャクシンの樹に仏性のすべてが詰まっている」については「全部は1でもある」、「猫を切った和尚と草鞋を頭に被った高僧」については「凝り固まった常識こそ最大の執着の根源だ」、「月が2つある」については「幾つだって別に良いじゃないか」等々、私なりの解釈を施してきた。

もちろんこれらはあくまでも私の脳トレの結果であって、世に出回っている専門家の答えとは異なっている。だから私の言うことを丸のみにしても責任は持てない。そしてこの注意は、禅関係のみならず今までに書いてきた約2600個の記事のすべてに当てはまる。だが科学万能主義を信じていない私としては、答えが一人ひとり異なるのはむしろ良いことだと思っている。

最近縁があって、白隠禅師の生涯に触れた。彼が出世欲皆無でひたすら真理を追究したことは、当時無名であえて田舎に住み僧としての位格も最低だったが人知れず悟りの高かった道鏡慧端老人（老師と呼ばれていない）をわざわざ師に選んで修行に励んだことにも表れている。白隠はこの老人から「達磨大師は何をしに中国に来たのか」と問われて「仏法を伝えるためです」などと答えては、「馬鹿野郎」と怒鳴り返されていた。まあ私だったらさも饅頭でも食べるふりをして、「食べちゃったのでもうありません」とでも答えるところだろう。

こうつらつら書いてきて最近思ったのだが、仮に脳トレ程度でも私が悟りに触れてい

たとしても、それはしょせん他人事ではないか。本当に困ったときや悲しい時など、このような気づきは何の助けにもならないのではないかということだ。だとしたら私は、やはり脳トレだけのために役にも立たない小難しい学問をやっているとして私が普段ばかりにしている、学者センチーと言う名のとっちゃん坊やと何ら変わらないのではないか。

私は孤独が好きである。一人でいるのが一番落ち着くのだ。誰でもそうだと思うが私も小さいころから、「友人を作るように努力しなさい」とか「友人がいない奴は人間失格だ」などと諭されてきた。言われるとおりに努力をしたこともあった。だが人生も佳境に入って自分を自分で左右できるようになってみると、少なくとも私は正直に「独りぼっちが最高」なのだ。会社でも派閥に入らなかったし、それで損もしたがずっと気楽だった。

今の私は誰が何と言おうと「独りぼっちは悪くない」と自信を持って言える。そしてそんな孤独を好む人は私のような変わり者だけかと思っていたら、イラストレーターで芸人としても独特の存在感を出している蛭子能収（えびすよしかず）さん、あの見るからに人のよさそうな人も同じことを言っているので、「へえ！」と思った。実際彼は最近、「独りぼっちを笑うな」という本を出している。

そんな彼が一度だけ、悲しくて寂しくて困ったことがあるという。それは最愛の奥様を亡くした時だそう。とにかく悲しくて泣きっぱなし、趣味の競艇だろうが子供の存在だろうが何の慰めにもならなかったという。結局蛭子さんも、奥様がいたから独りぼっちが最高の境地でいられたのだ。

この事実を自分に照らしてみると、やはり当てはまるように思う。もし嫁様が今死んだら、今趣味にしている瞑想も今までに得た「悟り」もなにもかも役に立たなくてただ独りぼっちを悲しがるだけだろう。運が悪ければ悪い宗教に騙されて、全財産を巻き上げられるかもしれないとすら思う。

アニミズムの観点に立てば動物だっていつか死ぬし、冬になれば草木も枯れる。あるいは高僧に相談しても「悲しみこそが執着であり捨て去るべきものだ」と諭されるだけだろう。特に、主張が正しすぎて何の慰めにもなっていない「坊主のくせに冷たい奴だ」などと批判されている小池龍之介さんなど、絶対にこう言うだろう。

結局現に嘆いている人が必要としているのは、客観的な真理ではなく主観的な慰めなのだ。目の不自由な人に「あなたの目は網膜が剥離しています」と伝えたところで、何の意味があるだろうか。それよりはバスの乗り降りに手を貸すとか席を譲ってあげ

とかの方が、小さなことだがよほど親切ではないだろうか。だから私も脳トレよりももっと先にすべきことがあるのではないか。

こうつらつら考えてきて、もし嫁様がある日なくなったらまあ泣くだけ泣くのだろうと思う。一休宗純は「風邪をひくときにはひくが良かろう」と言ったそうだから、泣くときには泣くのが良いのだ。そしておそらくこう考えるだろう、「もし嫁様が先に死ななかったら私が先に死ぬことになるが、それでは嫁様はおそらく路頭に迷うだろう。だったら嫁様を先に逝かせてあげるのは親切であり愛情なのだ」と。

小池龍之介さんは不幸にして頭が良すぎて物事を忘れることができないので、毎日生懸命に忘れる訓練をしている。でもその超客観は頭脳明晰がゆえに治らない。実体の伴わない公案や脳トレもこれと似たようなものだ。パズルが解けた喜びはあってもそれは例えば鉄道ファンがレアな写真が撮れた時よりも、いくばくでも高度でも何でもないのだ。本当の知恵は本当の慰めのために使うべきであると今は思う。

## 22、理系脳

もう何年か前になるが民主党が第一党だった時に、鳩山由紀夫、菅直人と理系の政治家が立て続けに首相になり、しかもいずれも頓珍漢で、「理系にリーダーや経営者は向かない」という常識すら確立されるに至った。おそらく民間の社長人事にも、微妙な影響を与えたことだろう。理系脳は本当に総合管理職に向かないのであろうか。

理系脳が総合職に向かないという伝説は実はこのご両人以前からあった。その理由としては、①全体観がなく細部にこだわること、②人の心が読めないこと、③常識がなくて頓珍漢なこと等が挙げられていた。確かに理系脳や理系教育にはこういう傾向がある。そもそもガリレオやダーウィンでもその傾向はあったが、特に相対論や量子力学に至っては、「常識を捨てろ」とか「非常識が正解の条件」とかが理系の常識になった。

だが他方で、「理系脳だからこそ深掘りの評論ができる」と評価された人たちも居る。長谷川慶太郎さんとか大前研一さんといった大物評論家たちが代表である。長谷川さんは冶金工学専攻で、大前さんは原子力工学専攻だったが、これらの人たちの深い読みには、通り一遍しか習わないし考えない文系卒業者にはまねのできない鋭い切込みがあった。

最近の有名人で私が挙げたいのは、骨董鑑定の中島誠之助さんだ。博学と切れの

良い鑑定で、対象物の本質をその重要性に応じた按分で一刀両断にする解析力には以前から理系脳を感じていた。そして最近中島さんの本を読んだら書いてあったが、大学では農獣医学部でプランクトンの研究をしていたという。プランクトンと骨董、何か分かるような気がする。博物学は切込みと全体観のどちらも重要な種類の理系分野だからだ。

こういった人たちと対極にどんなことでもわかりやすく説明してくれる典型的な文系脳の代表として、私は池上彰さんを挙げたい。この人は経済学部卒でかみ砕いた論評で有名だが、私はこの人の解説に事物のメリハリを感じないし切込みや深みも感じない。先日も本来専門外の地震発生メカニズムについて解説していてその幅の広さには感心したものの、その説明はなにか法律の条文でも読み上げているような感じなのだ。この人にとってはおそらく、プレート理論も皇室典範も同列なのだろう。

理系脳重視は中国でもあった。20年位前に朱容基(しゅようき、チュロンチ)さんが首相になったときは、主要ポストはみな何らかの分野の専門家で、「中国も専門家の時代になるほどに進歩した」と言われたものだ。ちなみに朱元首相の専門は電力工学である。

さて、このように理系脳の基礎を持った人が全体論をやると事物の理解が平板にならず、気づきも鋭くてしばしば感心される一方で、鳩山さんや菅さんのような頓珍漢の面もある。この現象は国家に限らず会社の経営層でもしばしば見られる現象だ。例えば東急グループの五島哲さんが居る。理系脳は表と出ればキレが良く裏と出れば頓珍漢になる。表になるか裏になるかは多分にその人の素質にもよるのだろうが、具体的に専攻した分野にも依るようだ。理系と一言と言っても実は広い。

そこで裏と出た鳩山さんと菅さんについて見てみると、鳩山さんは計数工学を、菅さんは応用物理を専攻している。どちらもモノづくりでなくて机上の理論が中心の分野である。この点が「表と出た」人々と異なっている。物を作る工学や博物学は、専門性もさることながら全体観もないと仕事や習得が進まない。つまり理系としての底は深くないが常識は必要とするのだ。そして鳩山さんと菅さんに不足していたのもこの常識だ。

鳩山さんは見解が揺らぐことを責められた時に「宇宙の根源は揺らぎである」などと、それ自体は真理なのだが全く明後日みたいな答弁でどや顔をしていた。菅さんは大地震と原発爆発という国家の一大事の時に、担当大臣にでもやらせておけばよいような現地視察のパフォーマンスを自らやっていた。いずれも帝王学が完全に欠落しているのだ。鳩山さんなど帝王学の中で成長したはずなのに、全然身についていない。

現在首相の安倍晋三さんは法学部の出身である。多少理解に平板なところはあるものの一度雌伏した反省効果もあって、大局をよく見極めて大きなことのみに専念しているところは、内容に賛否はあるもののかなり安心できる。安倍さんもやはり帝王学の中で成長しているが、鳩山さんと違って基本は身についているようだ。ちなみに民主党が、弁護士等の高学歴者をそろえながらも頓珍漢だった最大の理由も、この帝王学の欠如であろう。

どんな組織でもリーダーに立つ人には、帝王学が必要である。そしてこれが戦後はどこでも教えられていないのだから、二世三世が世襲と揶揄されてもリーダーとして有利になるのは仕方ない。首相のみならずトヨタ自動車だってパナソニックだってトップはみんなそうではないか。だからこの生まれの不平等をなくすには理系文系の区別なく、大学でもっと帝王学を教授すべきだということになる。ここで帝王学とは仁義礼智信とか信賞必罰とか率先垂範とか文武両道とか敬天愛人と言った積極的な心構えに加えて、私心をなくして真理を求め、人を愛し愛される性格となる実践学である。これらの項目は、戦前はエリートの心得として学んだものだ。

結局理系教育は偏りの副作用もあるものの、大切なのは「だから理系を辞める」のではなくて、逆に人としての当然の人格の養成を加えることだと思われる。

### 23、私のライフワーク

ライフワーク、これのためなら人生を賭けても良いと思えるほどの自分の生涯にかかる仕事である。世の中にはライフワークのある人となない人がいる。ない人の方が多くて、そういう人はあてがわれた仕事を黙々とこなしてたまに余暇にはちょっと遊びに行けば済むのだから、ある意味気楽である。そしてこういう人の方が多いから、世の中の仕事は圧倒的につまらないのにやり手に事欠かないのだ。世の中は実によくできている。

他方で天からライフワークを託されている人、これは何としてもやり遂げないと自分の気もすまないし天も許してくれないから、こういう人の人生は結構紆余曲折が多い。日本人なら代表的なのは登山家の上村直巳さんか。彼のライフワークは登山、特に5大陸最高峰の単独制覇であった。そのためには資金もパトロンも必要で、時には貧乏暮らしや保証のない生活も余儀なくされたが、ライフワークを全うすの苔の一念で頑張れたのだ。

植村さんの場合目標達成寸前で遭難してしまった。だが志は常に前向きであったし、またもし達成後も存命であったら目標喪失による精神疲労でこれまた大変だったかもしれない。私は彼の人生を完璧だと思っている。

さて植村さんの話を出した後で不肖私の話を出すのは愚かにも程があるのだが、私にも燕雀には燕雀なりのライフワークがある。そして私のライフワークとは、実は最近やっと言葉で説明できるようになったのだが、未発見の法則を見出して今のデジタル科学一辺倒の偏った世界構造をバランスさせることだ。

私は小さいころから、生まれつきなのか幼いころの未知体験が原因なのか最早分からないが、どうしても譲れない固有の視点があった。その固有の視点、心象としては物心ついた時からあったのだが言葉にできたのは最近で、それは言えば「素朴な疑問と意外な気づき」である。子供は生まれるとまず親に教えられ、次いで学校で先生に教えられ、最後に社会や会社等で教えられる。だが私にはその彼らが当然と疑わずに親切で教えてくる常識と社会慣行の多くが、どうも嘘くさくてなじめなかった。

私はおそらく素直でない扱いにくい人間に、箸にも棒にもかからない人物に見えたことだろう。だが私の素朴な疑問と意外な気づきは心象として、言葉にすることはできないまま積み重なっていった。最近になって落ち着いてきて、様々な分析や内省を通してやっと少しづつこうして日々書けるようになってきたが、それは最近のことである。

そんな素朴な疑問の1つが、「量子力学や相対論は宇宙の最終原理ではないのではないか」という疑問である。量子論によると世の中のすべての事象は確率でしか示されないとなっているし、そういう場面も多いだろうが他方で、「では今までの人類の歴史や生物の進化が単なる偶然の組み合わせで結果論にすぎないか」と問うならば、そこには何か一本の柱と言うか羅針、確率にもかかわらず蓋然的に揺るがない見えざる一定の方向があるように思う。つまりそこには量子論を超えた未知の大法則があるのだ。そしてこの素朴な疑問の解決と定式化にはおそらく、外界を記述する物理だけでなく人の内的な脳構造の定式化も必要であろう。そのためには心象を記述する新しい数学が必要である。

もう一つの素朴な疑問は、「数字や足し算や掛け算は当たり前か」という点である。ほとんどの人が疑いなく嫌々ながら掛け算九九を丸暗記し、そのおかげで日常の商売から工業生産に至るまでできている。だが「役に立てばどんなものでも本質的だ」と言うことはない。なぜそういう特定の数字や演算が現代で幅を利かせているのか、私には素朴に不思議であった。これらは数学では体とか環とか群といった形で整理されて

いるが、実際のところこれらは足し算や掛け算を後追いで追認しているだけだ。そもそもこれらの数字や演算は平面等の線形次元空間を前提にしている。次元を外せばもっと別の見え方が見えてくる。幾何学の合同や相似だって、暗に次元空間を前提としているのだ。

そしてこれらの素朴な疑問の根底には、「世の中は単に点の集まりか」というさらに根本的な疑問がある。数字は点であり、今の数学は「連続体も点の無限子の集まりである」として済ましている。その方が沢山の定理が出るからだ。だが多産であることと本質であることや人に自然であることは全く違う。実際自分の心象形成を内省してみると、人には形をとらえるという極めて優れた能力があることが分かる。いや、人と言わなくても犬猫の時点で既にある。そのおかげで生物は危機を回避し食料を得ることができるのだ。そして形の認識とは漠然から細部へと進む方向でなされる。今の情報理論のチューリングマシンのような「yes か no か」の一発勝負ではないのだ。

今の人工知能の研究方向にも賛成しかねる。現行の計算機科学は大きく2つの方向がある。いわば理論派と現実派だ。理論派は計算機を何とか人の脳に近づけようとして、図形認識を訓練したり東大の入試問題を解かせたりしている。他方現実派は計算機と人の脳は違うと割り切ったうえで、計算機固有の能力を極限まで使いこなそうとする。先日言及した、1千万ケタの素数の発見などその例である。私は精神的には理論派だが、人の脳と能力の発達を内省すると、自己保存に直結する本能を基本としてこれを経験と学習で細部化することで成長していくことが分かる。ところが人工知能にとげを刺しても「痛い」とか更に「逃げよう、自分を守ろう」と言うようなリアクションは全く起きない。つまりこのプリミティブな時点で今の人工知能研究は終わっているのだ。

結局人の脳や宇宙全体をより深く知るにはアナログがキーワードになるが、アナログの場合デジタルと違って非次元空間であり形の直視になるので、高々蓋然的にしか法則や数理はないように見える。特にこの新しい局面を実験で、つまり従来の科学的手続きでやろうという心構えからして限界があると感じる。「科学＝頭脳明晰＝根拠＝盤石」と思われているが、むしろ「根拠のない中間状態」を美しく推測できるのが、脳の最も高度なつまりクリエイティブな使い方ではないか。それに比べたら科学など、当たり前のことを証明しているだけだ。

私のライフワークも植村さんよろしく、生きているうちに終わりそうもない。少しでも余分に切り込めたらそれで喜ぶべきであろう。

## 24、心象の成長

以前の記事で、生物と機械の最大の違いは心（心象）を有するか否かであり、人の脳と人工知能の決定的な違いは「自ら感じるか否か」であることを指摘した。人は切られると痛みを感じこれを防御しようと自ら行動するが、人工知能の部品を壊しても機能の一部が損壊するのみである。ルールに「痛い」と書いておけば「痛い」と言うアウトプットは出すが、自らが痛いわけではない。

ただどうしても分からないのがこれら人の諸心象の脳内におけるトポロジーである。そこで人の脳における「痛い」と言う脳内反応、これを赤ん坊の成長とともに経時的に見ていこう。痛いという心象の生成であるが、まずは指等から脳へ神経系を通して信号あるいは励起状態が伝達され、それが脳内の特定のエリアでの励起状態となる。ここまでは機械でもできる。人の場合は本能により事前に設定された脳内の特定の励起位置で、伝播した刺激が脳に痛みを感じさせる。つまりあたかも脳に直接とげが刺さったかの状態になる。

生まれたばかりのころは心象の種類は多くなくて、せいぜい好きと嫌い、あるいは良いと悪いくらいだろう。指が切れると脳の「嫌だ」部位が、あるいは「嫌ホルモン」を出すかあるいは「嫌型」に励起するのだ。その結果赤ん坊はとりあえず、本能レベルの設定された反応として泣き出す。これは腹がすいた時も大して変わらない。そしてミルクをもらって満足して「好きホルモン」の分泌か「好き型」励起が起き、本当に心地よくなる。併せて「嫌な時は泣くと逃れられる」と言う法則を学習する。

こうして当初の心象は「好き」と「嫌い」の2種類くらいしかないが、成長とともにいろいろ動けるようになりまた学習の回数と種類が増えるとともに、同じ「嫌い」だったものが、腹がすいた場合とけがをした場合で微妙な違いが判るようになってくる。機械にはない人特有のアナログ能力である、「似ているものを同じとまとめる能力」の発露である。こうして「嫌だ」心象は「腹が減った」心象と「痛い」心象に分離していき、かつそれらに対する対応も異なることを、自ら学んでいく。

この時点では心象の種類は10以上になり、「嫌型」は隣り合いつつも分化し、「好き型」もやはり隣接しつつ分化していく。合わせて、関係の深い「〇〇が好き」と「××が嫌だ」同士はより接近する形へと、トポロジーの相互調整をしていく。この時すでに心象相互のトポロジーは決して平面的あるいは次元式的ではないので、早くも非次元空間の原型ができる。加えてそれらの位置は固定ではなくむしろ振動していて、波の性格も有する。こういう行為が積み重なって人の脳空間は、より複雑でかつ環境に対応

できるだけに成長していく。

このように本能とその後の経験学習により心象は成長していくので、脳内での心象の強さや広さは心象ごとに多種多様であり、スパッと切れる物理法則のようなものは存在しない。これは心象が、そもそも複雑な周囲の環境の概略の写像であるということの反映でもある。しかもそれらのトポロジーは常に揺らぐし、また個人単位でも大まかには同様なものの異なってくる。この「大まかに同様」なのが人としての一般的な共通の傾向であり、細かい異なりが個人の個性に対応する。

こういった心象空間の全体像をイメージするのは容易ではない。だが少なくとも部分的にも平面や立体のような線形ではないことは、容易に察しが付くだろう。もっとふにゃふにゃした雲のようなものだ。数とか足し算とか掛け算等は数直線や平面の存在を無言の前提としているから、皆が当たり前と思い込んでいて教えられている今の算数や数学も、脳内空間ではかなり特別な例外的なケースと位置付けられる。その例外の内側をごちゃごちゃいじっているのが、今の数理科学である。

心象空間はむしろ、粒度や粒形が異なる多様な結晶粒の集まり隣り合った集合体をイメージした方が近いだろう。それにしても未経験の事象、例えば初めてマンゴを食べたときのあの食感と味は脳内でどこにどうやって張り付けられるのだろうか。全く新たな味だから、少なくとも既にある心象の内挿ではないはずだ。まあ「甘い」の近くとか「メロン」の近くとか、はじめはその辺だろうか。これも心象空間の発達の様相である。この辺の操作から心象に特有の、何か新しい演算フィールドが見えてくると良いのだが。

さて、人の心象は本能をベースとした統合学習で成長することを見てきたが、もしこれだけだとすれば人は自己防衛以外の何らの行動もしないことになる。しかし現実には美しい芸術を見て感動したり、温泉につかってリラックスしたり、うまいものに舌鼓を打ったりと、それがなくても生死にかかわらないようなことを好んで行う。むしろ人生全般ではこちらの方が、より価値が大きいほどだ。こういう趣向の存在はどう説明できるのだろうか。またその脳内位置はどの辺だろうか。

おそらく本来的発生的には自己保存本能だろう。具体的には「より安全」とか「超安全」と言った、「危険から遠い」と言う距離感と余裕の喜びが発生源である。だが現実にはこのような経路を忘れるほどに、喜びは人の固有の大きな人生の目的になっている。人以前にサルやカピバラでも温泉に入るし、猫や犬は喉をくすぐると気持ちよがる。まさか首を絞められようなどとは思わない。生物にこのような余裕ができたのは、思うに

生物が生殖と世代交代を終えてもなお生きることとなったのとほぼ同じタイミングではないか。

これらの喜びや感動と言う心象の位置関係は本能よりもさらに複雑であろうが、まとめて概観するならばいずれも「危険」からはもっとも離れた位置にあるだろう。また喜びや感動については、本能からももっとも離れた位置にあるものと思われる。こういった特徴的な心象の在り方を瞑想することにより、脳内空間の秩序が見つかってくるかもしれない。

2016. 04. 17